静岡県立美術館

第三者評価委員会評価報告書

令和４年３月

静岡県立美術館第三者評価委員会

目次

はじめに 1

【報告編】

１　静岡県立美術館第三者評価委員会について 2

２　令和２年度　静岡県立美術館第三者評価委員会評価総括表 5

２－１　基本方針別自己評価 6

【資料編】

１　展覧会に関する自己点検評価表（令和２年度） 11

２　調査・研究に関する自己点検評価報告書（令和２年度） 17

３　定性評価の状況（令和２年度） 27

４　第三者評価委員会での意見と対応状況 38

５　設置者の取組状況 43

別添資料　静岡県立美術館評価業務 報告書（令和３年３月）

はじめに

本委員会は、評価を通じて静岡県立美術館の自律的かつ継続的な運営改善を推進することを目的として、平成 18 年９月に発足しました。

本委員会の使命は三つあります。第一は、県立美術館が自ら行う自己評価（一次評価）に対して、外部の視点から二次評価することです。第二には、美術館に対する県庁（本庁）の支援体制を委員会が独自の視点に立って評価することです。第三は、美術館の運営及び評価の方法について、次年度の改善に向けた提言をすることです。

本年度の活動としては、令和３年７月に第三者評価委員会を開催し、令和２年度の美術館自己評価に対する二次評価、設置者の取組に対する意見、今後の改善課題について討議しました。この報告書はその結果に基づき作成したものです。

本報告書が県庁と県立美術館のますますの発展と充実に資することを願います。

令和４年３月

静岡県立美術館第三者評価委員会

委員長　松本　透

１　静岡県立美術館第三者評価委員会について

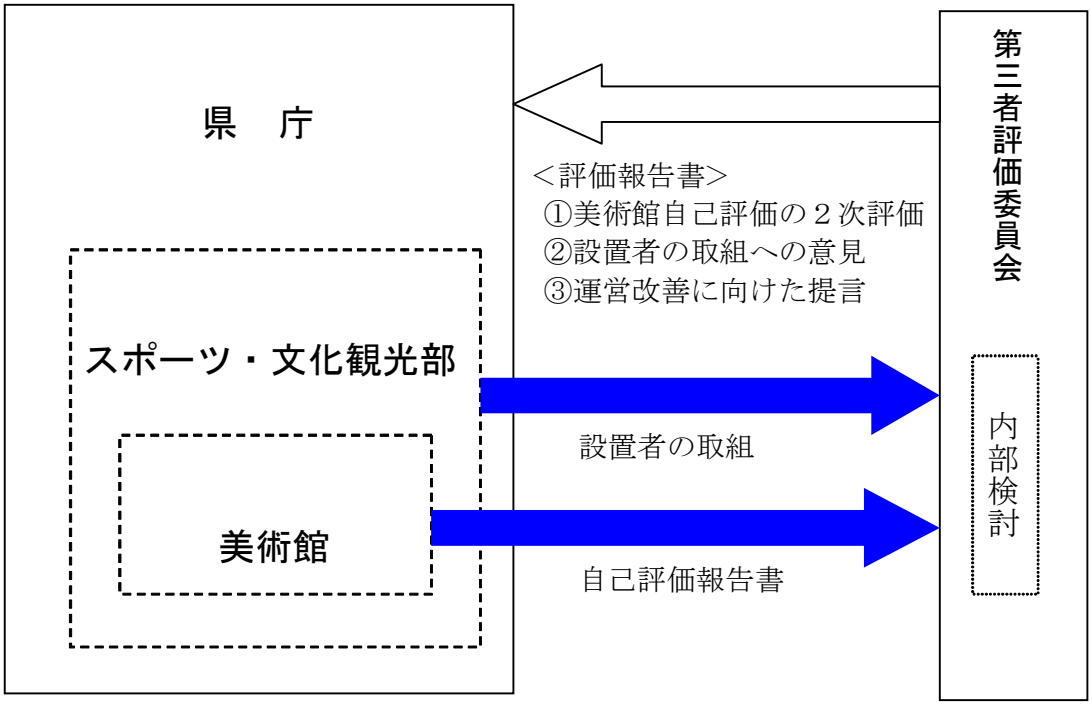
静岡県立美術館第三者評価委員会委員名簿（敬称略、五十音順）

	候補者	役　　職
委員長	松本（まつもと）　透（とおる）	長野県立信濃美術館館長
委員	稲庭（いなにわ）　佐和子（さわこ）	東京都美術館 アートコミュニケーション係長
〃	荻原（おぎわら）　康子（やすこ）	公益財団法人墨田区文化振興財団　専門員
〃	貝塚（かいづか）　健（つよし）	アーティゾン美術館　教育普及部長
〃	神山（かみやま）　眞理（まり）	日本大学国際関係学部　元教授
〃	櫻井（さくらい）　透（とおる）	静岡銀行株式会社　元会長
〃	田中（たなか）　啓（ひらき）	静岡文化芸術大学教授
〃	前田（まえだ）　忍（しのぶ）	浜松・浜名湖ツーリズムビューロー 理事・事業本部長

令和３年度の活動

会議名等	内容等
第１回第三者評価委員会	日時：令和３年７月 16 日（金）14:00～16:00 会場：静岡県立美術館　講座室 内容：（１）美術館自己評価結果について （２）設置者の取組みについて 備考：新型コロナウイルス感染症対策として、オンライン形式で開催。

評価システム全体図（第三者評価委員会の位置付け）



静岡県立美術館第三者評価委員会設置要綱

（設置）

第１条　静岡県立美術館（以下「美術館」という。）では、より良いサービスの提供を図るため、事業の運営等の効果について、多面的かつ客観的な測定・評価を行う自己評価活動を実施しているが、美術館の自律的かつ継続的な運営改善を推進するため、美術館の自己評価及び県庁の支援体制等を第三者の視点から評価する「静岡県立美術館第三者評価委員会」（以下「委員会」という。）を設置する。

（所掌事務）

第２条　委員会は、次に掲げる事項を所管する。

（１）美術館の自己評価に対する２次評価

（２）県庁の支援体制等に関する評価

（３）評価結果の報告及びそれに基づく美術館の運営改善に向けた提言

（４）その他、この委員会の目的達成に関すること

（委員）

第３条　委員は、知事が委嘱する。

２　委員の人数は、10 名以内とする。

３　委員の任期は２年とする。ただし、その委員が欠けた場合における補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

４　委員は、再任されることができる。

（委員長）

第４条　委員会に、委員長１人を置く。

２　委員長は、知事が指名する。

３　委員長は、会務を総理し、会議の議長となる。

（会議）

第５条　委員会は、委員長が招集する。

２　委員会は公開とし、その傍聴に関して必要な事項は、別に定める。

３　委員会は、必要に応じて個別課題検討のための分科会を置くことができる。

４　委員会及び分科会には、委員以外の者に出席を求めることができる。

（事務局）

第６条　委員会の事務を処理するため、事務局を静岡県スポーツ・文化観光部文化政策課内に置く。

（その他）

第７条　この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に必要な事項は、委員長が別に定める。

附　則

１　この要綱は、平成 18 年９月 21 日から施行する。

２　この要綱の施行の日に委嘱する委員の任期は、第３条第３項の規定にかかわらず、平成 20 年３月 31 日までとする。

（最終改正　令和２年９月 30 日）

【使命】 ＝美術館のめざす姿	静岡県立美術館は、創造的で多様性に富んだ社会を実現していくために存在します。 そのためにコレクションを基盤として人々が美術と出会い新たな価値を見出す体験の場をより多く提供するとともに、地域をパートナーと考える経営を行い、日本の新しい公立美術館となります。

基本方針	計画(P) 重点目標		評価指標	目標	実施状況(D) 実績	評価(C) 自己評価	第三者評価
A 人々の感性を豊かにし、生活に新たな感動をもたらすような展覧会を開催します	1 新たな視点や工夫に基づく企画展を積極的に開催します	1 展覧会の来館者数(人)	130,000 人	141,893 人	【成果】 ・「展覧会の来館者数」は、新型コロナウイルス感染拡大の影響もある中で、目標を達成することができた。 ・自主企画・企画参加型展覧会は2本(富野由悠季の世界展、ムーミン展)だったが、「来たれ、パウハウス」展、「みんなのミュシャ」展においても当館学芸員が図録に寄稿し、内容の充実に貢献した。 ・「収蔵品展の観覧者数」は、目標を僅かに下回った。 ・「展覧会における新規来館者の割合」は、「富野由悠季の世界」展に県外からの来館者が増えたこともあり、大幅に増加した。「みんなのミュシャ」展でも、新規来館者が多く来館した。また、新規来館者の中には、若年層が多く含まれていた。 ・学芸員の調査・研究の成果により、企画内容が充実し、結果として「作品やテーマに興味を持った人の割合」は、昨年度よりも増加し、目標を達成した。 ・購入・寄贈は、コレクション・ポリシーにもとづいた充実した内容の作品を収集することができた。 【課題】 ・講演会、学芸員のフロアレクチャー等、展覧会関連イベントが、新型コロナウイルス感染拡大、首都圏への緊急事態宣言発出により、相次いで中止となった。ウィズ・コロナの時代の美術館経営について、検討することが継続して必要である。 ・収蔵品展及び収集活動の充実のため、予算の確保を含む学芸員の調査研究体制を確保することが引き続き重要である。	・R2年度の企画展はサブカルチャー寄りだったが幅が広がったという意味でも上手くいったのではないか。(神山) ・自館のコレクションを大切にするという考えは重要なこと。そのためには、調査・研究の体制をしっかりしたものにしていく必要がある。人の気持ちを掴む上手い広報が出来ると良い。(神山) ・コロナの影響の中これだけの来館者数を確保できたのは頑張ったと思う。新規の来館者数が増加したことについて、分かったこと、見えてきたことを整理して今後に生かすと良い。(田中) ・収蔵品に関してデジタル化を推進しているとのことだが、それ以外にも動画での配信などバーチャルなものの活用を今後も積極的に行ってほしい。(田中)
		2 自主企画・企画参加型の展覧会の回数(回)	4 回	2 回			
		3 作品やテーマに興味を持った人の割合(%)	88.0 %	90.6 %			
		4 展覧会における新規来館者の割合(%)	20.0 %	43.9 %			
		5 展覧会に対する外部評価 【定性】	―	別添			
	2 他の美術館・大学との連携を進め、企画力を強化します	6 調査研究の発表回数(回)	15 回	10 回			
		7 内部セミナー・研究会・研修の回数(回)	14 回	10 回			
		8 他の美術館や大学と連携した取組件数(回)	3 回	2 回			
		9 調査研究に関する外部評価 【定性】	―	別添			
	3 特徴あるコレクションを形成し、効果的に活用します	10 収蔵品展の観覧者数	12,000 人	10,443 人			
		11 収蔵品の公開件数	300 件	378 件			
		12 作品購入件数・価格(件・千円)	4 件 10,000 千円	4 件 9,955 千円			
		13 作品寄贈件数・価格(件・千円)	10 件	4 件 6,800 千円			
		14 公開・貸し出した展覧会における学芸員のレポート【定性】	―	別添			
B 地域や学校教育との連携を深め、質の高い芸術教育と普及活動を展開します	1 質の高い芸術教育と普及のプログラムを開発します	15 学校教育と連携した取り組み数(件)	250 件	67 件	【成果】 ・学校教育との連携において、感染リスクの高い体験型プログラムが中止を余儀なくされた一方、教材貸出プログラムについては継続的な利用が見られた。これまでの連携の蓄積が生かされ、コロナ禍における学校の美術教育の充実に貢献することができた。 ・講義系・実技系いずれにおいても、オンラインによるリモート講座やYouTube配信といった新たな手法によるイベント実施を試みた。 ・8年間参画してきた「めぐるりアート静岡」の最終年となった。地域の多様な機関が連携して開催する現代アートプロジェクトにおいて、当館が重要な役割を担い、近隣施設との連携を強化できたことは、大きな成果といえる。今を生きる公立館としての課題や可能性を探るうえでも有益な機会であった。 【課題】 ・コロナ禍で地域や学校教育との連携の機会は大幅に減少したが、これまで築いてきた関係を維持し、発展させていくために、現今の情勢下で可能な連携のあり方を検討し、実施していく。 ・「アーツカウンシルしずおか」との連携を進める。本年1月に静岡県文化財団に新たに設置されたこの組織は、県民の芸術文化活動支援を目的としており、地域住民やNPOの活動に関する情報に通じる。複数の専門スタッフを抱えるアーツカウンシルしずおかとの連携や情報交換は、重点目標B-3で目標とする地域住民およびNPO等との連携に資すると思われる。	・学校現場では、タブレットを使ったWEBの教育システムについて色々と模作していると思うので、時間・空間的な差を飛び越えるための道具としてWebをどのように使うのか考えて欲しい。(櫻井) ・ホームページを見ていて以前と比べると大分見やすくなって非常に便利なったと思うが、作品の3分の1くらいが著作権の関係等で見られないと書かれているため、可能であれば改善して欲しい。(櫻井) ・オンラインの内覧会というのをぜひ学芸員の方に定期的にWeb配信を定期的にして頂きたい。(前田) ・ここ最近、静岡県では教育旅行需要が急激に増加しており、教育旅行客向けのプランを作るなど戦略を考える必要がある。(前田) ・オンラインで収蔵品を紹介しながら、対話的に作品を見ていくといった、ミュージアムリテラシーを涵養するような講座が望まれている。また、ボランティア活動についてもオンラインの活用ができるのではないか(稲庭)
		16 鑑賞系プログラム数(件)	20 件	15 件			
		17 コレクションを活用したプログラム数(件)	20 件	14 件			
		18 普及・教育プログラムに関する美術館職員のレポート 【定性】	―	別添			
	2 講座・講演会・シンポジウム・演奏会等を充実します	19 講演会等の開催件数(回)	160 回	48 回			
		20 学芸員のフロアレクチャー等の数(回)	120 回	43 回			
	3 地域住民、企業、NPO等と連携した美術館活動を充実します	21 地域住民等と連携した取組数(件)	7 件	2 件			
		22 館内空間を生かした催事の件数・参加者数(件・人)	90 件 5,000 人	15 件 18,328 人			
		23 地域空間、住民等と連携した取組に関する職員レポート 【定性】	―	別添			
C さらに積極的な広報を工夫し、美術館活動の情報発信に努めます	1 広報戦略を策定し、広報の質を高めます	24 美術館に関する情報が「入手しやすい」とする人の割合(%)	70.0 %	78.5 %	【成果】 ・「美術館に関する情報が「入手しやすい」とする人の割合」は、HPやSNS等を積極的に活用して広報を行うことにより、目標を達成することができた。 ・「ホームページのアクセス件数」は、前年度(1,085,837件)に比して大幅に増えた。入場者数の多い展覧会が続いたことに加え、新型コロナウイルス感染拡大により、開館状況などの最新情報へのニーズが高まったことが背景にあると考えられる。 ・「ホームページの満足度」は目標を若干下回った。 ・コロナ禍の中でも「ロダンウィーク」を開催し、感染リスクを押さえる工夫をしてイベントを実現できたことは成果といえる。 【課題】 ・HPやSNSに加えて、公式YouTubeチャンネルを開設し動画配信を開始するなどしたが、これ以外ではウェブサイトを通じた新規事業を打ち出せておらず、オンラインコンテンツの拡充が課題である。 ・ロダンウィークでは4日間で1,666人の来館者を得たが、通常時のロダン館への誘客は継続的な課題である。 ・「観光業界や他のイベントとの広報連携の取組数」は、コロナ禍において実施が困難となり、減少したが、ウィズ・コロナ、アフター・コロナを見据えて、観光業界及びマスコミ等との連携により、美術館の発信力を高めることが課題である。	・3Dコンテンツを取り入れて、リアルとバーチャルのハイブリッド型の情報発信により県美の事を紹介し、県美に行く機会を創出するといった取組を行っても良い。(前田) ・静岡県立大学内でメーリングリストによる広報を行って頂きたい。(田中) ・SNSはこれから重要になってくる。特に若い層はWeb検索では無くインスタ等がメインの情報ツールとなっている。外部委託をして広報ターゲットの分析を行い、有料広告の掲載を行うのも良いのでは無いか。(稲庭) ・工事休館期間を使って館の魅力をSNS等で発信して頂きたい。(荻原)
		25 ホームページのアクセス件数(件)	600,000 件	1,460,987 件			
		26 ホームページの満足度(%)	75.0 %	71.8 %			
	2 観光業界等と連携した新たな広報チャンネルの開拓に取り組みます	27 観光業界や他のイベントとの広報連携の取組数(件)	7 件	5 件			
		28 広報手法における新たな取組状況に関しての美術館職員のレポート【定性】	―	別添			
	3 ロダン館の認知度を高め、来館者を増やします	29 ロダン館の入場者数(人)	80,000 人	76,874 人			
D 常に施設の改善に努め、美術館の快適度を高めていきます	1 館内施設を充実させ、満足度を高めます	30 美術館利用者数(人)	253,807 人	238,540 人	【成果】 ・「レストラン・カフェの満足度」は、メニューの工夫等により、目標を達成することができた。 ・「ミュージアムショップに対する満足度」は、目標値を大きく上回った。企画展に合わせた商品のレイアウトを工夫したことが主な要因である。 ・「鑑賞環境に対する満足度」は目標に及ばなかったが、施設の老朽化が進む中、スタッフをはじめとする関係者の細かな工夫により、一定の水準を保っている。 【課題】 ・「美術館利用者数」は、令和元年度に引き続き目標を達成することができなかった。令和2年度は、新型コロナウイルス感染拡大による入館者数減少が大きく影響していると考えられる。ウィズコロナ、アフターコロナを見据えて感染対策をし、利用者数の増加を目指す。 ・開館から35年が経過したことで、経年劣化による建物及び各設備の修繕が必要となっている。 ・「来館者のアクセス満足度」は、目標を下回った。公共交通機関については、バスの運行本数の問題があり、自家用車については、駐車可能台数と利便性の問題がある。	
		31 鑑賞環境に対する満足度(%)	90.0 %	80.6 %			
		32 レストラン・カフェに対する満足度(%)	75.0 %	89.7 %			
		33 ミュージアムショップに対する満足度(%)	85.0 %	91.8 %			
	2 周辺環境やアクセスの利便を向上させます	34 来館者のアクセス満足度(%)※再掲 ※上段:公共交通機関利用、下段:自家用車利用	80.0 80.0 %	68.8 54.7 %			

	取組の状況	第三者評価委員意見
設置者の取組	・令和2年度は計5回、美術館の企画展について記者提供を行った。 ・企画展のチラシやポスターを、県庁内、東京事務所、観光協会などに送付し配架を依頼した。 ・アフターコロナ時代において安全安心な鑑賞環境を提供するため、デジタルコンテンツの充実化を行っている。 ・令和元年度に劣化診断に基づく中期維持保全計画を策定し、計画的な修繕を行った。	・デジタルコンテンツの活用についてはアフターコロナを見据え、新しい客層ファン層を獲得していくくらいの意識を持って行って欲しい。一方的な伝え方についてはどの施設もある程度出来るようになっているが、アーティストのような双方向的な伝え方を取り入れるなど工夫する余地がある。(荻原)

評価指標の見直し	・来館者数だけではなくオンラインでのアクセスが重要で、そのために魅力的なコンテンツを作っていかなければならない。(荻原) ・館長から説明のあった内容で問題ないと考えているが、少し加えると、自己評価というものは美術館自信が評価をするのが中心となるので、美術館の活動やあり方を考える上で参考になるような仕組みにしていって欲しい。説明のための仕組みであるという以前に、自己評価、自己改善のための仕組みであるといった捉え方をして欲しい。(田中)

基本方針	A　人々の感性を豊かにし、生活に新たな感動をもたらすような展覧会を開催します

計画（P）					実施状況（D）R3.3.31現在		評価（C）
重点目標		評価指標		目標	実績	特記事項	自己評価
1	新たな視点や工夫に基づく企画展を積極的に開催します	1	展覧会の来館者数（人）	130,000　人	141,893　人	◆は、自主企画・企画参加型展覧会	【成果】 【きたれ、バウハウス展】 本展は静岡市内で初めて開催される初めてのバウハウスの展覧会であり、これまで「バウハウス」についてあまり知る機会のなかった鑑賞者に向けて、学校としての「バウハウス」の歴史や理念、「バウハウス」で学んだ日本人留学生、日本における「バウハウス」の美術教育の実践例などについて啓発、普及を行うことができた。 【みんなのミュシャ展】 よく知られたポスター作品のみならず、ミュシャの様式の展開を辿ることの出来る展示となった。また、ミュシャの与えた影響の一つとして、日本のマンガ、特に少女漫画への造形的な影響を示し得た。 【富野由悠季の世界展】 コロナ禍対策として共同巡回館と協力してウェブ上の広報施策を積極的に展開した。加えて地元マスコミの協力もあり、目標以上の来場者を得た。また、内容面での評価も高く、「日本アニメーション学会賞2020 特別賞」を受賞することができた。 【パラレル・ヒストリーズ展】 当館の現代美術コレクションで構成し、また近年展示されていない作品や静岡ゆかりの作品などを含み、コレクションの厚みを伝える機会となった。アンケートでは、テーマや作品への興味や関心が深まった方が9割弱おり、好評であった。また無償の鑑賞ガイドを配布し、普及に努めた。 【ムーミン展】 ・印刷物の選択的送付、グッズ付き前売り券発売など、広報に力を言入れたこともあり、目標を大きく越える実績を達成できた。 ・コロナ対策のため、人件費の支出が当初より大幅に増えたが、会場構成費の抑制などにより、予算から捻出することができた。 ・入場制限制を導入し、最大で3時間待ちとなった日もあったが、待機場所の確保、ゆとりを持たせた作品展示など、事前準備を入念に行ったことで、会期中大きな混乱はなかった。 【課題】 【きたれ、バウハウス展】 「バウハウス」研究の成果という観点からとらえると、開校100年を迎えて、教育の現場や、建築の概念も時代とともに変化してきていることから、「バウハウス」を新たな視点でとらえなおす時期に来ていることを考えさせる展覧会であったといえる。 【みんなのミュシャ展】 繊細な表現を持つ脆弱な紙媒体をご覧頂くには、当館展示室の照明環境はあまりに悪い。2021（令和3）年度工事による改善が切に望まれる。 【富野由悠季の世界展】 富野作品を愛する多くの男性ファンに支持されたが、女性ファンや一般美術ファンに富野アニメの歴史的意義を伝えられたかは未知数。また、現代アニメを展示する空間としては、新鋭館揃いの巡回他館にかなり見劣りしたと感じている。 【パラレル・ヒストリーズ展】 今回実施した有料のインターネット広告は、今後も展開するならバナーデザインや設定期間の工夫等により、効果を高めることが望まれる。鑑賞ガイド等の小冊子を制作する場合は、ねらいやターゲットをふまえ、内容の充実を図りたい。 【ムーミン展】 ・待機場所や展示室の混雑はある程度抑えられたが、グッズ売り場は混みあい、レジに長蛇の列ができるなど、もう少し事前に対策案を練るべきであった。 ・権利関係の制限が厳しかったことや、コロナ禍による緊急事態宣言のため、館長美術講座以外のイベントを開催できなかった。
			きたれ、バウハウス展（44日間）	13,000　人	8,453　人		
			みんなのミュシャ展 （50日間）	35,000　人	41,713　人		
			◆富野由悠季の世界展（42日間）	20,000　人	31,492　人		
			◆パラレル・ヒストリーズ展(41日間)	7,000　人	4,252　人		
			ムーミン展(44日間)	33,000　人	40,923　人		
			収蔵品展	12,000　人	10,443　人		
			移動美術展	10,000　人	4,617　人		
		2	自主企画・企画参加型の展覧会の回数（回）	4　回	2　回		
		3	作品やテーマに興味を持った人の割合（%）	88.0　%	90.6　%		
		4	展覧会における新規来館者の割合（%）	20.0　%	43.9　%		
		5	展覧会に対する外部評価 【定性】	―			
2	他の美術館・大学との連携を進め、企画力を強化します	6	調査研究の発表回数（回）	15　回	10　回		【成果】 ・館長出席のもと、学芸員による研究会をほぼ毎月のペースで実施し、コレクションについての研究を深めた。 ・7については6と同じ。 ・8については、①静岡県博物館協会事務局としての活動、②めぐるりアート静岡の2件である。当館だけではできない事業を推進することができた。 ・9については、学芸員の調査研究に対して一定の成果が評価された。 【課題】 ・コレクションの形成と収蔵品展・企画展の充実のため、学芸員の研究をさらに深める必要がある。 ・9「研究活動評価」は、学芸員の研究活動において重要な役割を果たしており、研究活動の指針として生かしていく。
		7	内部セミナー・研究会・研修の回数（回）	14　回	10　回		
		8	他の美術館や大学と連携した取り組み件数（回）	3　回	2　回		
		9	調査研究に関する外部評価 【定性】	―			
3	特徴あるコレクションを形成し、効果的に活用しますます	10	収蔵品展の観覧者数（人）	12,000　人	10,443　人	収蔵品の公開件数は、 ・収蔵品展(7室+名品コーナー) <181件> ・「美の競演展」<112件> ・「パラレル・ヒストリーズ展」<68件> ・他館への貸出件数　<17件> を合計したものである。	【成果】 ・「収蔵品展の観覧者数」については、コロナウイルス感染拡大等の影響により、目標値を僅かに下回ったが、安定した集客を維持している。 ・日頃の学芸員の研究をもとに、内容の充実した特色のある収蔵品展を開催した。 ・日本画、とりわけ江戸狩野派の優れた作品を購入することができ、また、西洋美術、現代美術、日本洋画の作品の中でコレクション・ポリシーに相応しい作品の寄贈を受けることができた。 ・寄贈作品群が、質と量ともに充実してきており、当館コレクションの核の一つとなりつつある。 【課題】 ・充実したコレクション形成と収蔵品展の開催には、学芸員の研究の継続と質を保つことが重要である。 ・購入についての継続的な予算化を図るとともに、寄贈についても、質の高い作品を収集していくことが今後も課題である。 ・収蔵品展の観覧者は、中部に偏重する傾向があるため、今後は、西部・東部・伊豆等、全県に来館を促すことが課題である。
		11	収蔵品の公開件数（件）	300　件	378　件		
		12	作品購入件数・価格（件・千円）	4　件 10,000　千円	4　件 9,955　千円		
		13	作品寄贈件数・価格（件・千円）	10　件	4　件 6,800　千円		
		14	公開・貸し出した展覧会における学芸員のレポート 【定性】	―			

基本方針	B　地域や学校教育との連携を深め、質の高い芸術教育と普及活動を展開します

計画（P）					実施状況（D） R3.3.31現在		評価（C）
重点目標		評価指標		目標	実績	特記事項	自己評価
1	質の高い芸術教育と普及のプログラムを開発します	15	学校教育と連携した取り組み数	250 件	67 件	プログラムの内訳は、別紙。	【成果】 ・学校・園を対象としたねんど・えのぐ教室が通年取り止めになるなど、コロナ禍により予定通り実施できなかったプログラムが多くあったが、対策をとった上で一部プログラムについては再開することができた。 ・実際の来館が難しいなかでも、レプリカや粘土の貸出プログラムを学校現場で活用してもらうことができ、これまでの活動の蓄積を生かしてコロナ禍における学校での美術教育の充実に貢献することができた。 ・東京在住の講師と美術館実技室とをオンラインで結び講座を実施することができた。 【課題】 ・新しい生活様式に対応したプログラムを検討するとともに、参加者が来館できない場合、講師が来館できない場合等、様々な場合を想定して準備をする。 ・一部再開できたプログラムがあるとはいえ、学校・園と美術館の接点は例年よりも減少しているため、これまで築いてきた連携を維持継続するための方法を検討する。 ・多くのプログラムが実施不可となるなか、外部の助手なども含めた実技室関係スタッフが経験を積むことが難しい状況にある。令和3年度後半は実技室が使用できなくなることもあり、スタッフのスキルアップの機会を作り、現場感を維持していくことが課題となる。
		16	鑑賞系プログラム数	20 件	15 件		
		17	コレクションを活用したプログラム数	20 件	14 件		
		18	普及・教育プログラムに関する美術館職員のレポート【定性】	ー	別添		
2	講座・講演会・シンポジウム・演奏会等を充実します	19	講演会等の開催件数	160 回	48 回	数値内訳 20＝美術講座(7回)＋フロアレクチャー(17回)＋オリエンテーション(16回)＋出張美術講座(3回)＋展示関連普及事業(0回) 19＝上記＋特別講演会・シンポジウム(3回)＋ボランティア等によるギャラリーツアー(0回)＋演奏会等(2回)	【成果】 ・展示室における発話を伴うイベントはすべて取りやめ、可能な場合には別室での解説会を行うなど別の形でのレクチャーで代替した。 ・在外講師と当館会場をオンラインでつなぐ講演会（みんなのミュシャ展）、対談のYouTube配信（富野由悠季の世界展）など新たな形式を取り入れた。 【課題】 ・オンラインによるイベント実施のハードルを下げスムーズに運営するために、職員の技術や知識を向上させる。 ・代替措置としてのオンライン講座や別室でのレクチャー実施を進めつつ、現在の状況でも効果的に実施できるイベントの手法を検討する。
		20	学芸員のフロアレクチャー等の数	120 回	43 回		
3	地域住民、企業、NPO等と連携した美術館活動を充実します	21	地域住民等と連携した取組数	7 件	2 件	・地域住民と連携した取組に関しての詳細は、【定性レポート】を参照。 ・館内空間を生かした催事については、本館エントランスを使用した「ちょこっと体験講座」、「めぐるりアート静岡」、ロダン館の「ロダン館コンサート」「ロダンクイズラリー」を計上。	【成果】 ・館内空間を生かした催事は、ちょこっと体験1,310人、めぐるりアート静岡16,638人、ロダン館内コンサート380人の参加者があり、地域に密着した事業を展開できた。 ・谷田地域の文化教育7機関（美術館、県立大学、中央図書館、埋蔵文化財センター、SPAC、グランシップ、ふじのくに地球環境史ミュージアム）が多分野で連携しているムセイオン静岡において、参加施設を紹介する「ふじのくに文化の丘フェスタ2020」に参加し、他機関との共同事業を実施したことにより、相互の関係性をより深化することが出来た。 【課題】 ・コロナ禍の中で地域住民との連携した取り組みを実施することが出来なかったことから、アフターコロナを見据えて地域との連携について引き続き検討・実施していくことが課題である。
		22	館内空間を生かした催事の件数・参加者数	90 件 5,000 人	15 件 18,328 人		
		23	地域住民等と連携した取組に関する職員レポート 【定性】	ー	別添		

基本方針	C さらに積極的な広報を工夫し、美術館活動の情報発信に努めます

計画（P）					実施状況（D） R3.3.31現在		評価（C）
重点目標		評価指標		目標	実績	特記事項	自己評価
1	広報戦略を策定し、広報の質を高めます	24	美術館に関する情報が「入手しやすい」とする人の割合	70.0 %	78.5 %	・展覧会・イベントについての情報や来館案内をホームページに掲載。 ・Facebook、Twitter、Instagramの利用。	【成果】 ・前年度（1,085,837件）に比してホームページのアクセス件数が大幅に増えた。入館者数の多い展覧会が続いたことに加え、コロナ禍により各地の美術館・博物館で休館措置や予約制導入の動きがあったため、開館状況などの情報へのニーズが高まったことが背景にあると考えられる。 ・入場制限制の導入に伴い、休日を中心に混雑状況をSNSでリアルタイムで発信し、来館者にとっての利便性を向上させることができた。 ・ホームページのうち、長らく前世代のスタイルのままであった「風景の交響楽（シンフォニー）」を現行ホームページのスタイルにリニューアルすることができた。また館蔵品検索のページに「ハイライト」コーナーを新設した。 【課題】 ・コロナ禍において国内外各地の美術館がウェブサイト等を通じて様々なコンテンツの提供を開始する中、当館では動画の配信などを除けば、新規の事業を打ち出せなかった。オンラインコンテンツの更なる拡充が望まれる。
		25	ホームページのアクセス件数	600,000 件	1,460,987 件		
		26	ホームページの満足度	75.0 %	71.8 %		
2	観光業界等と連携した新たな広報チャンネルの開拓に取り組みます	27	観光業界や他のイベントとの広報連携の取組数	7 件	5 件	・観光業界や他のイベントとの広報連携の取組 「企画展における企業との連携」 「ムセイオン静岡」 「めぐるりアート静岡」 「ふじのくに文化の丘フェスタ2020」 詳細は【定性レポート】を参照。 ・広報手法における新たな取組状況に関しての詳細は、【定性レポート】を参照。	【成果】 ・HPやSNSに加え、公式YouTubeチャンネルを開設し動画配信を開始するなど、従来のメディアに加えて積極的にインターネットにおける広報を行ったことにより、「美術館における情報が入手しやすい」とする人の割合が増加した。 【課題】 ・観光業界や他のイベントとの広報連携は、コロナ禍においてイベント等の実施が困難となり、取組み件数が減少したが、ウイズ・コロナ、アフター・コロナを見据えて、地域連携及び観光業界との連携模索し、美術館の発信力を高めることが課題である。
		28	広報手法における新たな取組状況に関しての美術館職員のレポート【定性】	ー	別添		
3	ロダン館の認知度を高め、来館者を増やします	29	ロダン館の入場者数	80,000 人	76,874 人	・「ロダンウィーク」開催期間中は、ロダン館・収蔵品展の観覧料を減免したり、クイズラリーや缶バッチをプレゼントするなど集客を図った。	【成果】 ・コロナ禍においても「ロダンウイーク」を開催し、４日間で1,666人の集客をすることが出来た。 【課題】 ・「ロダンウイーク」開催中のロダン館観覧料無料、オリジナル缶バッチのプレゼントに加え、さらに屋外イベント(令和2年度コロナ禍により中止）参加者を美術館内に誘導する仕組みを検討する。

基本方針	D　常に施設の改善に努め、美術館の快適度を高めていきます

計画（P）					実施状況（D） R3.3.31現在		評価（C）
重点目標		評価指標		目標	実績	特記事項	自己評価
1	館内施設を充実させ、満足度を高めます	30	美術館利用者数	253,807　人	238,540　人	鑑賞環境に対する満足度を向上させるため、令和2年度は次の工事（小規模を除く）を行った。 ・本館空調機器熱源（R-1吸収式冷凍機）更新工事 ・本館空調機器熱源（R-2スクリュー冷凍機）更新工事 ・本館機械室内断熱材改修工事	【成果】 ・ 美術館利用者数は、コロナ禍の影響もあり目標をやや下回ったが、適切な感染症対策を行って運営した結果、前年度より増加した。 ・ 鑑賞環境については、耐用年数を超える本館空調機器熱源（R－1吸収式冷凍機・R－2スクリュー冷凍機）の更新を行い、館内の空調環境を安定させることができた。 ・ 屋外の園地緑地について、懸案となっていたプロムナード植栽の大規模な剪定や民地との境界付近の樹木や竹の伐採・剪定を行い、美術館周辺の環境整備を行った。 ・ レストラン・カフェに対する満足度は展示に合わせたメニューの工夫等により、昨年度の75.0%から今年度は89.7%に向上し、目標（75.0%）を大きく上回った。 ・ ミュージアムショップの満足度は91.8%で昨年度の94.0%からわずかに低下したが、目標（85.0%）を大きく上回った。企画展に合わせて商品のレイアウトを工夫し、お客様の満足度向上につながった。 【課題】 ・ 当館は開館から30年以上が経過し、経年劣化等により建築及び各設備に多くの不具合が生じている。このため中期維持保全計画に沿って、改修を進めていく。 ・鑑賞環境に対する満足度を向上させるため、令和3年度は照明のLED化を行う。今後も来館者の声を聴き、必要な整備を進めていく必要がある。 ・ レストラン・カフェの運営については、業者に営業を委託しているが、美術館レストランとして質の高いサービスの提供に努め、一層のお客様のニーズの把握に努めることが求められる。
			◆展覧会観覧者数	130,000　人	141,893　人		
			◆移動美術展	10,000　人	4,617　人		
			◆教育普及プログラム参加者数	24,807　人	9,909　人		
			◆ミュージアムコンサート入場者数	200　人	380　人		
			◆県民ギャラリー入場者数	40,000　人	15,067　人		
			◆講堂入場者数	8,000　人	2,692　人		
			◆レストラン・カフェ利用者数	20,000　人	10,881　人		
			◆ミュージアムショップ利用者数	20,000　人	56,131　人		
			◆図書閲覧室利用者数	800　人	1,587　人		
		31	鑑賞環境に対する満足度	90.0　%	80.6　%		
		32	レストラン・カフェに対する満足度	75.0　%	89.7　%		
		33	ミュージアムショップに対する満足度	85.0　%	91.8　%		
2	周辺環境やアクセスの利便を向上させます	34	来館者のアクセス満足度 ※上段：公共交通機関利用 　下段：自家用車利用	80.0　%	68.8 54.7　%		【成果】 ・ 当館への利用交通機関で最も多い自家用車でのアクセス満足度は目標の80%には達しなかったが、昨年度の64.9%から67.2%とわずかに向上した。来館者の多い企画展の際には、隣接する県立大学の職員駐車場の借用、交通誘導員を配置などの対応を行い、交通渋滞を招かないようにした。 【課題】 ・ 自家用車・公共交通機関ともアクセス満足度は目標を下回った。自家用車利用者については、敷地内に無料の駐車場があるものの収容台数が約400台と限られている。令和3年度は、人気のある企画展では時間予約制を導入して来館者の分散化をし、効率よく駐車場を利用できるようにする。公共交通機関を利用される場合については、運行が1時間間隔であることなどが影響していると考えられる。令和3年度は混雑が予想される企画展については、バスの増便をバス会社に依頼する。

資料編

【資料１】

展覧会に関する自己点検評価表（令和２年度）

１「開校 100 年　きたれ、バウハウス-造形教育の基礎-」展

２「みんなのミュシャ　ミュシャからマンガへ一線の芸術」展

３「富野由悠季の世界」展

４「パラレル・ヒストリーズ　現代アートの諸潮流」展

５「ムーミン展　THE ART AND THE STORY」

（様式1）

展覧会自己点検評価表

展覧会名	開校100年 きたれ、バウハウス−造形教育の基礎−

期　間	4月11日（土）～5月31日（日）（45日間）
場　所	静岡県立美術館第1～6展示室

担当者名	川谷承子

学芸員の企画への参加の有無	有・無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	有・無
マスコミ等による共催の有無	有・無	巡回の有無	有・無

記入日	企画	2020年5月12 日(火)
	実績	2020年 月 日( )

企画		実績・検証
目的・内容	【内容】 2019年に開校100年を迎えたことを記念して企画された展覧会。学校としてのバウハウスに焦点をあて、基礎教育で各教師が行ったユニークな授業内容を紹介するほか、その一端を体験することができるコーナーを設ける。加えて各専門課程での教育の豊かな成果を国内所蔵の多彩な作品で紹介するほか、日本からバウハウスに留学した4人の学生の作品や資料を一堂に展示する。 【目的】 本展では、開校100年という節目の年を機会に、造形教育に革新をもたらすとともに美術史に大きな足跡を残したバウハウスの活動を、学校としての視点からとらえなおし、教育を通して実現した創造の可能性と、今日的な意義を考え、その成果を現代の鑑賞者と共有することを目的とする。	【研究活動評価委員会からの意見（要約）】 新型コロナウイルスの感染症の感染拡大に伴い、委員による展覧会視察がかなわず、図録に関するレポートのみご提出いただいた。 【潮江委員】各世代の研究者たちが執筆した日本のバウハウス研究の集大成とも言える、読み応えのある図録である。日本人留学生について論じられているだけでなく、日本におけるバウハウス教育の実践例が取り上げられ、先駆的で独自の内容も含まれており、開校100年を記念するにふさわしい広がりを感じさせる。一方で、「バウハウス」から100年経過した現在、グロピウスが提唱した「バウ」を中心とした総合芸術や、美術教育の理念は、実態とはずれてきている。その点から、バウハウスの研究と評価の視点を変え、地域性、時代性、特殊性の観点から更に掘り下げて見つめなおす時期が来ていると考える。 【山梨委員】図録の論考はいずれも鑑賞者の理解を助けるところが大きいと思われる。今後期待する課題としては、日本の建築分野でバウハウスでの教育がどのように展開されたのか、あるいは、バウハウス教育が日本以外の地域に異なる形で受容されたことを検証する研究なども出てきていることから、バウハウス受容の国際比較も今後のひとつの視点になろう。機械文明の発達の中で手仕事をどう位置付けるかという点において、アーツ・アンド・クラフツ運動と比較する視点も興味深い。
期待される成果 ・ねらい ・主なターゲット	【ねらい】 当館では、紹介する機会の少ない建築のジャンルを含んだ展覧会であり、デザインの展覧会としても、2015年の「スイスデザイン展」以来、久々の展覧会である。バウハウスは、デザイン、建築、美術、工芸、ドイツ文化、造形教育と対象とする領域が幅広いため、多様な鑑賞者層を引き付けるテーマである。 建築、デザインの仕事に従事する人、またはその学生、または生活を豊かにすることに関心を持ち、アンテナを張っている人々に訴求する内容であることから、新たな来館者を呼び込むことに期待したい。 【ターゲット】 中部地方在住の、プロダクトデザイン、グラフィックデザイン、建築、美術、工芸、ドイツ文化、バウハウスに関心のある10代～70代の男女。	【アンケートにみる特徴】 （実施せず）
指標（数値目標）	観覧者数見込　13,000 人	観覧者数　8,453人
収支計画	・歳出　13,500千円 ・歳入　7,309千円 ・特財率　54.1％	・歳出　7,113千円 ・歳入　6,372千円 ・特財率 89.6％
広報戦略 主な取組	・デザイン、建築の専門教育を行う機関への、チラシ、印刷物の発送。美術館SNSを通じての広報。 ・ミサワホーム、アウディジャパン、各国大使館、各国文化センターなど展覧会協力者を通じての広報。 ・静岡シネギャラリー「バウハウス映画祭」との相互広報 ・「バウハウス100JAPAN」を通じてのSNSでの告知。	企画段階で計画していた広報の取り組みはすべて行い、途中休館期間を除けば、入館者も着実に増えて、一定の成果は得られたと考えている。
自己評価 今後の課題	静岡市内で初めて開催される初めてのバウハウスの展覧会であったことから、これまで「バウハウス」についてあまり知る機会のなかった中高年、若者層を中心に、本展を通じて、学校としての「バウハウス」の歴史や理念について、あるいは「バウハウス」で学んだ日本人留学生、日本における「バウハウス」の美術教育の実践例などについても啓発、普及を行うことができたと思われる。一方で、「バウハウス」研究の成果という観点からとらえると、開校100年を迎えて、教育の現場や、建築の概念も時代とともに変化してきていることから、「バウハウス」を新たな視点でとらえなおす時期に来ていることを考えさせる展覧会であったといえる。集客面では、共催メディアでのテレビCM、美術館のSNS、バウハウス100周年委員会を通じて発信されるSNS等の広報効果も手伝って、通常であれば目標の13000人を超える入館者があったと考えられる。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴って発令された緊急事態宣言により、会期途中の4月18日～5月11日までの期間に休館を余儀なくされ、最終的な入館者数は8500人にとどまった。休館明けの、会期終了間際の週末には、1000人近い来館者があったが、この段階では大幅な入場制限をすることなく、始終放送でソーシャルディスタンスを呼びかけるなどし対応した。	

（様式1）

展覧会自己点検評価表

展覧会名	みんなのミュシャ　ミュシャからマンガへ-線の芸術

期　間	7月11日（土）～9月6日（日）（50日間）
場　所	静岡県立美術館第1～6展示室

担当者名	三谷理華、新田建史

学芸員の企画への参加の有無	有・無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	有・無
マスコミ等による共催の有無	有・無	巡回の有無	有・無

記入日	企画	2020年6月1 日(月)
	実績	2020年 月 日( )

企画		実績・検証
目的・内容	【内容】 19世紀末から20世紀初頭にパリ等で活躍したアルフォンス・ミュシャ（1860-1939）は、当時新しく生まれた装飾様式「アール・ヌーヴォー」の旗手として名を成し、今日世界で広く愛されている。ミュシャ財団監修の下開催される本展は、ミュシャの作品と彼が後世に与えた影響を示す作品総計約250点で構成される。 【目的】 ミュシャがいかに多くの人や作品に影響を与え、今日目にするデザインにもミュシャが生み出した要素が存在しているのかを、展覧会をきっかけに改めて見直すことが本展のねらいである。したがって出品作品は、前半はミュシャの作品やその着想源となった収集品、後半は後世のグラフィック・アーティストや漫画家の作品が展示される。	【研究活動評価委員会からの意見（要約）】 （評価対象外）
期待される成果 ・ねらい ・主なターゲット	【ねらい】 ミュシャが手掛けた作品を多数展示し、「線の魔術」とも言える流麗な線描を特徴とする華麗な作品世界を紹介するとともに、初期の作品や収集した日本の美術品なども展示し、新たなミュシャ像を提示する。また、ミュシャから影響を受けた1960-70年代の米国のレコードジャケットデザイン等を展示し影響の意外な広がりを示す一方で、明治期の文芸雑誌の表紙や挿図から現代のマンガまで、その影響は日本のグラフィック文化にも深く浸透していることを紹介する。 【ターゲット】 県内在住の20代～シニア層までの主に女性 県内でデザインやグラフィック・アートを学ぶ学生 県内および県近郊在住の西洋美術や少女漫画等の愛好者	【アンケートにみる特徴】 （実施せず）
指標（数値目標）	観覧者数見込　35,000人	観覧者数　41,713人
収支計画	・歳出　16,000千円 ・歳入　16,086千円 ・特財率　100.5%	・歳出　16,000千円 ・歳入　21,566千円 ・特財率 134.8%
広報戦略 主な取組	・静岡県文化プログラムとの共催によるイベント開催。 ・商業施設等とのコラボによる広報展開の模索。	・静岡県文化プログラムとの共催によるイベント（新型コロナウィルス感染拡大に伴う国内移動制限により開催前日に中止決定）。　・新静岡セノバとの協力による広報展開。 ・セキスイハイム東海（展覧会協賛）顧客向け解説付鑑賞会実施。　・会期終盤でのポスタープレゼントキャンペーン実施。
自己評価 今後の課題	・新型コロナウィルス感染状況を考慮しながらの運営という前例の無い状況にはあったが、外部関係機関との良好な協力関係の下、有効な広報展開が可能となり、動員面での成果に繋がった。 ・展覧会コミッショナーとの良好な関係の下、展覧会に新知見を加えることに協力できるなど、学術面での貢献も成すことができた。　・展覧会を取り巻く諸状況の変化に応じた実行員会の意志決定の手順を予め整えておくなど、不測の事態に備えることも今後は必要と思われた。	

（様式1）

展覧会自己点検評価表

展覧会名	富野由悠季の世界展

期　間	9月19日（土）～11月8日（日）（42日間）
場　所	静岡県立美術館第1～6展示室

担当者名	村上敬

学芸員の企画への参加の有無	有・無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	有・無
マスコミ等による共催の有無	有・無	巡回の有無	有・無

記入日	企画	2020年4月21日（火）
	実績	2021年6月1日（火）

	企画	実績・検証
目的・内容	【内容】 「機動戦士ガンダム」で知られるアニメーション監督富野由悠季について、企画案、設定ラフ、原画、絵コンテ、セル画、映像等々、膨大な資料を集めて展観する回顧展。 【目的】 アニメ制作者として駆け出しのころから現在まで約50年以上にわたる富野監督の歩みを振り返る中で、それぞれの時代や人々に与えてきた影響と、そして彼が訴え続けたメッセージとは何かを紐解く。	【研究活動評価委員会からの意見（要約）】 （評価対象外）
期待される成果 ・ねらい ・主なターゲット	【ねらい】 来館者に現代アニメーションの古典ともいえる作家の回顧展を提供することで、現代日本文化について考えを深めてもらう。 【ターゲット】 中高生～50代くらいまでの年齢層。 性別比は男性6：女性4程度を想定。 東京展がないため首都圏からの誘客を狙う。	【アンケートにみる特徴】 ・全体来館者数のうち81.2%が男性。年齢層別では最も多かったのが40代（35.3%）、次が50代（22.7%）、3位が30代（20.1%）となっていた。 ・30～50代の男性は通常の美術展ではあまりみられない来場者属性であり、これらの方々の誘客につながったことは成果と言える。 ・ただし、逆に言えばコアな富野由悠季ファンの外にはあまり影響が伝播しなかったとも言える。 ・コロナ禍にもかかわらず、県外者が多かった（来館者全体のうちの44.0%、新規来館者に限れば66.9%が県外者であった）。
指標（数値目標）	観覧者数見込　20,000人	観覧者数　31,492人
収支計画	・歳出　17,639千円 ・歳入　13,119千円 ・特財率　74.4%	・歳出　16,270円 ・歳入　27,836千円 ・特財率 171.1%
広報戦略 主な取組	・静岡新聞・SBSの報道 ・サンライズ経由でアニメ関連媒体への露出 ・オリジナルグッズも誘客性ありと認める	・静岡新聞・SBSの報道も協力的で県内情報番組の現地ロケなどもあった。 ・共同巡回館と協力してのウェブ上の広報施策 ・ホビー誌など富野展ならではの露出 ・限定ガンプラなどオリジナルグッズも誘客に効果があった模様。
自己評価 今後の課題	・コロナ禍対策として共同巡回館と協力してウェブ上の広報施策を積極的に展開した。加えて地元マスコミの協力もあり、目標以上の来場者を得た。また、内容面での評価も高く、「日本アニメーション学会賞2020 特別賞」を受賞することができた。 ・富野作品を愛する多くの男性ファンに支持されたが、女性ファンや一般美術ファンに富野アニメの歴史的意義を伝えられたかは未知数。また、現代アニメを展示する空間としては、新鋭館揃いの巡回他館にかなり見劣りしたと感じている。 ・コロナ対策のため、講演会を対面から期間限定の配信方式に切り替えたが、12,000ビューを達成した。アフターコロナの時代にも活用できるメディアとしての可能性を感じた。	

（様式1）

展覧会自己点検評価表

展覧会名	パラレル・ヒストリーズ　現代アートの諸潮流

期　間	11月21日（土）～2021年1月11日（日）（41日間）
場　所	静岡県立美術館第1～6展示室

担当者名	植松篤

学芸員の企画への参加の有無	有・無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	有・無
マスコミ等による共催の有無	有・無	巡回の有無	有・無

記入日	企画	2020年5月10日(日)
	実績	2021年3月23日（火）

	企画	実績・検証
目的・内容	【内容】 当館収蔵作品を中心に、現代美術作品を精選し、戦後以降の美術の流れを概観する。目まぐるしく展開してきた現代美術の作品を、年代ごとに展示構成するのではなく、6つのテーマを設けて展示構成し、紹介する。 また、近年新たに収蔵された作品群や静岡ゆかりの作家による作品群も展示に組み込み、当館の特色を活かしたコレクションの展示活用を行う。 【目的】 当館では、これまで現代美術作品を収集してきたが、まとまった形で展覧する機会は16年ぶりとなる。当館がこれまで収蔵してきた現代美術コレクションの厚みを伝える機会とする。	【研究活動評価委員会からの意見（要約）】 今回の現代美術の展覧会、「パラレル・ヒストリーズ」展は、ともするとある一つの運動や傾向が生起して収束するという形での美術の歴史の提示という方法ではなく、現代美術のキー・コンセプトを六つにまとめて文字どおりパラレルに呈示して、患者に現代美術についての包括的な視点を喚起するべく仕組まれた、創意工夫を感じさせる展覧会になっている。もとより館独自のコレクションという限られた資源の中で包括的な視点を喚起する展示を構成することには困難があったと推察されるが、その問題点を一定以上の効果が期待される形で克服していることは、高く評価できる。（潮江） 現代アートをどのように定義し、分類するかは、対象が現在進行形であることもあって、大変困難な問題である。本展覧会で設定された6つの観点は、作家のアイデアが反映された物質を人の眼で見ることによって成り立つ造形芸術というものの基本を再確認させるものであった。展示された作品はどれも大変質が高く、現在では公立美術館の予算で購入がかなわないほどの市場価値をもつと予想されるものが多数ある。静岡県立美術館が歴史的な観点を踏まえて現代美術の動向を追い、収集を続けてきたことをよく示す展覧会であった。（山梨）
期待される成果 ・ねらい ・主なターゲット	【ねらい】 テーマ設定をすることで、現代美術に馴染みの薄い鑑賞者にも伝わりやすく提示する。また、美術ファンにとっても楽しめるよう、多様なテーマを設定する。 【ターゲット】 県内在住の美術ファン 20代から40代の年齢層	【アンケートにみる特徴】 ・美術館に何度も来館している方が多かった。10回～19回の来館がある層が25. 8%、20回以上の来館がある層が41. 6%であり、美術ファンが多かったと言える。 本展を通じて作品やテーマへの興味・関心が深まった方の割合は約88%、他の人へ推奨したい方の割合が約70%と高い結果を得られた。 ・年齢層については、アンケートからは、成人の来館者が、ばらつきがあるものの各世代10%～20%程度訪れたことになる。ただ、チケットの実数では、高・大生が14. 5%、有料の70歳以上が4. 2%であり、高齢の来館者層は多くなかったと言える。本展は、若者から60歳代までの、想定よりもやや広いターゲットに訴求したのではないかと考えられる。
指標（数値目標）	観覧者数見込　7,000人	観覧者数　4,252人
収支計画	・歳出　6,000千円 ・歳入　2,634千円 ・特財率　43.9%	・歳出　4,825千円 ・歳入　1,496千円 ・特財率 31.0%
広報戦略 主な取組	・ウェブ広報では、新規の情報提供先を調査し、拡充を図る。 ・チラシ、ポスター等の発送先や枚数を検討し、広報効果を高める。	・ウェブの広報先の追加や古い情報の更新を行った。また、有料のウェブバナー広告を静岡県内に展開した。アンケートではバナーを見たと答えた割合は9%であった。 ・広報物の郵送は、新型コロナウイルスの感染拡大状況を鑑み、県内に重点的に割り当て、県外については少数に絞ることとなった。 ・プレス向けの内覧会を行い、2社の参加があった。
自己評価 今後の課題	・当初の計画通り企画、実施することができた。本展の準備をする事が、各所蔵品やコレクションの総体への理解を深める事に繋がった。今後の企画や収集活動に生かしたい。 ・観覧者数は見込みの6割に留まった。コロナ禍のため県域を超えての広報展開がはばかられた点や、緊急事態宣言の発令などが大きなマイナス要因だったと考えられる。 ・歳入は予算より少なかったが、歳出を抑えたことで、収支については計画の範囲に収めることができた。 ・無料のウェブ広報に関しては、概ね新規開拓は済んだ。今回、美術に限らず情報掲載のある「いこーよ」を追加した。本展では美術ファンの来館が多かったと思われ、効果は少なかったかもしれないが、今後、企画内容によっては効果が高いと思われる。 ・今回行った有料のウェブバナー広告が、アンケート通り来館者の9%のビューがあったすると、費用に対して効果が高かったと言える。今後この広告を使用する場合は、バナーデザインや設定期間の工夫など、より効果を高めていくことが望まれる。 ・小冊子を1,000部発行し、無料で配布して現代美術の普及に努めた。予算の都合上簡易な冊子であったが、今後の同種の企画では、ねらいやターゲットをふまえて体裁や内容を検討し、充実させたい。	

（様式1）

展覧会自己点検評価表

展覧会名	ムーミン展　THE ART AND THE STORY

期　間	2021年1月23日（土）～2021年3月14日（日）（44日間）
場　所	静岡県立美術館第1～6展示室

担当者名	浦澤倫太郎

学芸員の企画への参加の有無	有・無	学芸員の企画への参加状況 ※カタログ執筆、出品交渉等	有・無
マスコミ等による共催の有無	有・無	巡回の有無	有・無

記入日	企画	2020年6月1 日(月)
	実績	2021年5月10日（月 ）

企画		実績・検証
目的・内容	【内容】 フィンランドの画家、小説家であるトーベ・ヤンソン（1914～2001）によって創り出された世界的キャラクター、ムーミンの世界を体感できる展覧会。フィンランドにある「ムーミン美術館」を中心に各所から集めた小説の挿絵や絵本の原画など約500点を展示する。 【目的】 小説挿絵の原画を展示するとともに、小説の内容についても紹介し、トーベの創作の歩みをたどる。また人形、陶器、ファブリックなどムーミンのキャラクターがデザインに用いられた商品も展示し、多様に展開されたムーミンの世界を概観する。更に写真パネルや資料によって、本邦におけるムーミンの受容の歴史も紹介する。	【研究活動評価委員会からの意見（要約）】 （評価対象外）
期待される成果 ・ねらい ・主なターゲット	【ねらい】 トーベ・ヤンソンが創作した世界の魅力の根源や普遍性を広く理解してもらう。更に創作の背景にあるフィンランドの文化、そして本邦における翻訳の経緯や、浮世絵に関わる展示を契機として、日本とフィンランドの交流にも興味を持ってもらう。 【ターゲット】 他会場の様子から、女性がメインになると思われる。特に幼少時にアニメーションが放映されていた30代～50代に訴求力が強いとみられる。更にこのメイン層が、家族、特に子どもの来館を促すことも予想される。 対象地域は、当会場が東京・名古屋会場の後の巡回となるので、県外からの来館は少なく、県内、特に中部および東部が中心になると思われる。	【アンケートにみる特徴】 （実施せず）
指標（数値目標）	観覧者数見込　33,000人	観覧者数　40,923人
収支計画	・歳出　12,000千円 ・歳入　14,171千円 ・特財率　118.1%	・歳出　12,000千円 ・歳入　19,970千円 ・特財率 166.4%
広報戦略 主な取組	・チラシやポスターなどの広報物は、商業施設や教育機関など、ターゲット層にかかわりの深いとみられる施設をリストアップし、効率的に送付する。	・諸事情からイベントや出品作品を載せた本チラシの製作が遅れ、その代わりに基本情報のみ掲載した先行チラシを制作した。 ・配布先は事前の戦略通り、県内の親和性の高い施設に絞った。図書館からの反響は大きく、館内に特設コーナーを設置していただいたケースもあった。
自己評価 今後の課題	・新型コロナウィルス感染症拡大のため、県外の一部地域に緊急事態宣言が発令される中での展示作業、開幕となったが、入場制限制の導入をはじめとした各種対策を、総務課の協力のもと事前に行っていたこともあり、会期中に大きな混乱はなかった。 ・上記新型コロナウィルス対策のために人件費を中心に支出が増大したが、その分は会場構成費を抑えることで捻出できた。 ・もともと本展では権利関係が厳しく、実技系のイベントが実現できなかったことや、新型コロナウィルス感染症拡大により、スライドトークなども中止にせざるを得なかったことから、観客の理解を深める機会を減少させてしまった。	

【資料２】

令和２年度

調査・研究に関する自己点検評価報告書

令和３年６月

静岡県立美術館

調査・研究に関する自己点検　報告書

提出日　令和 3 年 3 月 25 日

職・氏名　　上席学芸員　南 美幸

●専門分野　　美学・美術史
●所属学会　　美術史学会、日仏美術学会
●主要研究テーマ　　西洋美術史

1. 今年一年間に執筆した主な論文
（カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等）

1　論文「マルキ・ド・サド『イタリア紀行』ナポリ篇について－エルコラネンセ美術館の記述を中心にした翻訳と解題」（『静岡県立美術館紀要』第 36 号、2021 年 3 月）

小計　1　本

2. 今年１年間に携わった展覧会及び普及事業

1　企画展「美の競演－静岡県美名品展」取りまとめと実施
2　収蔵品展「耳をすませて－音と楽器のある風景」企画・実施
3　収蔵品展「耳をすませて－音と楽器のある風景」フロアレクチャー（講座室にて実施）
4　収蔵品展「耳をすませて－音と楽器のある風景」鑑賞パンフレット制作

小計　4　本

3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動

小計　本

4. 収蔵作品に関する論文・発表等【再掲】

小計（　）本

合計 5　本

調査・研究に関する自己点検　報告書

提出日　令和 3 年 3 月 31 日

職・氏名　　上席学芸員　新田建史

●専門分野　　美学美術史
●所属学会　　地中海学会、保存修復学会
●主要研究テーマ　　西洋 16～18 世紀美術、東西美術交流史、東西版画史、文化財保存

1．今年一年間に執筆した主な論文
（カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等）

小計 0 本

2．今年１年間に携わった展覧会及び普及事業
・「みんなのミュシャ」展　7 月 11 日（土）～9 月 6 日（日）・
・「みんなのミュシャ」展フロアレクチャー（会場を講座室に変更）　8 月 8 日（土）、8 月 29 日（土）
・「沼津市民文化センター移動美術展」　10 月 22 日(木)～11 月 3 日(火祝)
・「焼津文化会館移動美術展」　11 月 10 日(火)～11 月 25 日(水)
・「耳をすませて」展（収蔵品展）　11 月 17 日(火)～2021 年 1 月 24 日(日)

小計 5 本

3．上記以外の専門領域活動及びその他の活動
・「愛知県立芸術大学集中講義」9 月 24 日（木）、25 日（金）、11 月 17 日（火）
・「これからのミュージアムをかんがえよう」（静岡県博物館協会主催のオンラインシンポジウム）
　11 月 3 日（火祝）

小計 2 本

4．収蔵作品に関する論文・発表等【再掲】

小計 0 本

合計 7 本

調査・研究に関する自己点検　報告書

提出日　令和 3 年 3 月 31 日

職・氏名　　上席学芸員・村上 敬

●専門分野　日本近代美術・デザイン史、文化資源学
●所属学会　美学会、美術史学会、明治美術学会、文化資源学会
●主要研究テーマ　明治・大正期を中心とした近代日本洋画等

1. 今年一年間に執筆した主な論文
(カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等)

（1）学会発表：
元号と都市のユートピア――『サクラ大戦』の「太正」帝都
［大正イマジュリィ学会第 18 回全国大会シンポジウム「マンガの中の大正」(3/14)］

小計１本

2. 今年１年間に携わった展覧会及び普及事業

・企画展「富野由悠季の世界」展(主担当)
・企画展「ムーミン展 THE ART AND THE STORY」(副担当)
・企画展「富野由悠季の世界」展フロアレクチャー（10/11,18）

小計４本

3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動

・静岡市芹沢銈介美術館協議会委員（通年）

小計１本

4. 収蔵作品に関する論文・発表等

小計 0 本

合計６本

調査・研究に関する自己点検　報告書

提出日　令和３年　４月　１日

職・氏名　　上席学芸員　川谷承子

●専門分野　　現代美術
●所属学会
●主要研究テーマ　　戦後美術

1. 今年一年間に執筆した主な論文
（カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等）
・「めぐるりアート静岡　2020」展図録　臼井良平　作家解説「レンズ（眼鏡）としてのペットボトル」p. 38
・「ストーリーズ」展巻頭エッセイ、１章、４章、５章、６章、作家解説
・研究紀要「高松次郎『布の弛み』に関する考察」

小計３本

2. 今年１年間に携わった展覧会及び普及事業
○新収蔵品展
○企画展「開校 100 年　きたれ、バウハウス」展主担当
○「めぐるりアート静岡　2020」
○企画展「ストーリーズ～作品について学芸員（わたしたち）が知っていること」展主担当
○企画展「パラレル・ヒストリーズ」展副担当
○企画展「開校 100 年　きたれ、バウハウス」展フロアレクチャー（コロナのため中止）

小計５本

3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動
・寄贈作品の受け入れ（作品１点）ダレン・アーモンド

小計１本

4. 収蔵作品に関する論文・発表等【再掲】
・企画展「ストーリーズ」展図録論文
・研究紀要「高松次郎『布の弛み』に関する考察」

小計（2）本

合計９本

調査・研究に関する自己点検　報告書

提出日　令和３年３月８日

職・氏名　上席学芸員　泰井良

●専門分野　日本近代洋画史
●所属学会　明治美術学会、美術史学会
●主要研究テーマ　明治期の美術

1. 今年一年間に執筆した主な論文
（カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等）

・口頭発表「和田英作《松林（下絵）》と岩崎彌之助高輪邸について」【明治美術学会第２回例会】（9 月 5 日）

小計 1 本

2. 今年１年間に携わった展覧会及び普及事業

・収蔵品展「曽宮一念とその時代」（主担当）
・駿府博物館「曽宮一念展」ギャラリートーク（11 月 7 日）
・企画展「ストーリーズ」展（副担当）

小計 3 本

3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動

・一般財団法人地域創造企画検討委員
・全国美術館会議地域美術研究部会幹事
・一般社団法人浜松創造都市協議会理事

小計 3 本

4. 収蔵作品に関する論文・発表等【再掲】

（明治美術学会口頭発表「和田英作《松林（下絵）》と岩崎彌之助高輪邸について」（9 月 5 日））

小計（1）本

合計　7　本

調査・研究に関する自己点検　報告書

提出日　令和 3 年 3 月 31 日

職・氏名　　上席学芸員・石上充代

●専門分野　　近世・近代の日本画
●所属学会　　美術史学会
●主要研究テーマ　　近代日本絵画史

1. 今年一年間に執筆した主な論文
（カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等）

・「伊藤若冲《樹花鳥獣図屏風》の軌跡」（『ストーリーズ』展図録、2021 年 3 月 31 日）

小計　1　本

2. 今年１年間に携わった展覧会及び普及事業

・「富野由悠季の世界展」副担当
・収蔵品展「東京 2020 オリンピック・パラリンピック開催記念 きらめく日本画」担当
・出張美術講座　1 回

小計　3　本

3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動

・浜松市美術館美術資料審査会審査員
・静岡県立こども病院院内学級合同図工･美術講師

小計　2　本

4. 収蔵作品に関する論文・発表等【再掲】

・「伊藤若冲《樹花鳥獣図屏風》の軌跡」（『ストーリーズ』展図録、2021 年 3 月 31 日）【再掲】

小計（1）本

合計 6 本

調査・研究に関する自己点検　報告書

提出日　令和 3 年 3 月 31 日

職・氏名　　上席学芸員・野田麻美

●専門分野　　日本近世絵画
●所属学会　　美術史学会
●主要研究テーマ　　狩野派を中心とする桃山末～江戸時代の絵画

1. 今年一年間に執筆した主な論文
(カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等)
・「江戸狩野派による倣古図の基礎的研究―データベースの構築と分析手法の確立に向けて」(『鹿島美術財団年報別冊』37 号)
・「模写と倣古―江戸狩野派の場合」(『日本美術のつくられ方　佐藤康宏先生の退職によせて』羽鳥書店)

小計 2 本

2. 今年１年間に携わった展覧会及び普及事業
「美の競演―静岡県美名品展」(2020 年 6 月 13 日～6 月 28 日)
※フロアレクチャー　中止

小計 1 本

3. 上記以外の専門領域活動及びその他の活動

小計 0 本

4. 収蔵作品に関する論文・発表等【再掲】

・「模写と倣古―江戸狩野派の場合」(『日本美術のつくられ方　佐藤康宏先生の退職によせて』羽鳥書店)

小計 (1) 本

合計 3 本

調査・研究に関する自己点検　報告書

提出日　令和３年４月４日

職・氏名　　上席学芸員・植松　篤

●専門分野　　現代美術
●所属学会　　美学会、広島芸術学会
●主要研究テーマ　　戦後美術

1．今年一年間に執筆した主な論文
（カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等）

小計０本

2．今年１年間に携わった展覧会及び普及事業

・企画展「パラレルヒストリーズ　現代アートの諸潮流」展主担当
・同展対談１回
・同展館長美術講座１回
・同展フロアレクチャー2回
・企画展「開校100年　きたれ、バウハウスー造形教育の基礎ー」副担当
・収蔵品展「日本戦後美術の挑戦」展担当
・同展フロアレクチャー2回
・めぐるりアート静岡展示副担当
・めぐるりアート静岡関連イベント野点お散歩会２回
・めぐるりアート静岡関連イベント野点１回

小計13本

3．上記以外の専門領域活動及びその他の活動

小計０本

4．収蔵作品に関する論文・発表等【再掲】

小計（0）本

合計13本

調査・研究に関する自己点検　報告書

提出日　令和３年４月６日

職・氏名　　主任学芸員　浦澤倫太郎

●専門分野　　日本美術史
●所属学会　　美術史学会
●主要研究テーマ　　近世美術

1．今年一年間に執筆した主な論文
（カタログ論文・研究紀要・学術論文・学会発表・その他美術・美術館に関わる研究論文等）

小計　本

2．今年１年間に携わった展覧会及び普及事業
収蔵品展「富士山をめぐる」
移動美術展「広重・大観・ロダンが沼津にやってくる」（於　沼津市民文化センター）
　・フロアレクチャー4本
移動美術展「石田徹也を中心に」（於　焼津文化会館）
企画展「ムーミン展　THE ART AND THE STORY」

小計８本

3．上記以外の専門領域活動及びその他の活動

静岡大学における講義「小杉文庫について」（「地域の人と文字文化」内）２回

小計２本

4．収蔵作品に関する論文・発表等【再掲】

小計（　）本

合計 10 本

【資料３】

定性評価の状況（令和２年度）

評価指標５	展覧会に対する外部評価

【開校 100 年　きたれ、バウハウス展】〈参加型企画展〉

注：本展の評価にあたっては、開催期間中の新型コロナウィルス感染症蔓延状況に鑑み、委員の招集を回避し図録のみによる評価とした。

（潮江委員）
総評：
　各世代の研究者たちが執筆した日本のバウハウス研究の集大成とも言うべき、読み応えのある図録だということができる。これだけ多くの研究者が集ったことだけでも、素晴らしいとしか言いようがない。グロピウスの「バウ」の概念がしっかり論じられているだけでなく、資料的には多少物足りないが、各工房の方向性と教育成果が具体的に取り上げられ、「学校としてのバウハウス」という中心的な課題が論じられており、鑑賞者への普及・啓発に寄与することは言うまでもない。特筆すべきは、バウハウス本体だけでなく、バウハウスに学んだ複数の日本人学生について論じられているだけではなく、日本におけるバウハウス教育の実践例も取り上げられ、そこには先駆的で独自の内容も含まれており、開校 100 年を記念するにふさわしい、広がりを感じさせる編集姿勢に敬意を表したい。
　ただ、あまりに多くの執筆者で、しかもバウハウス研究という面で同じ方向を向いた執筆姿勢であるためか、多少の波の変化はあっても、同じ方向への波動が繰り返されているように感じられ、それがもたらす単調な印象が最後まで拭えなかったことも確かである。正直なところ、「バウハウス―普遍性と全体への渇望・あるいは新たな貧困―」と題した柏木博論文がなければ、老人には辛い字体の小ささもあり、窒息していたかも知れない。

今後の課題：
　バウハウス 100 年、確かにアカデミー教育に代わる新たな教育形態を提示し、師匠と弟子という古くさい関係を解き放ったことの意義は大きい。100 年前のドイツに思いを致し、そこからの足跡を辿って解き明かしていく作業は、どれだけ繰り返されても意義があるほどの大きな変化だったと思う。しかし、現在の美術教育の現場では、バウハウス由来の重要な用語、「素材」はまだ辛うじて生きているが、「造形」の方は用いられてなくなって 30 年は経つ。わたし自身の体験からしても、少なくとも 1990 年代にかかるころからこの言葉を使って美大生に話をすることはとても気恥ずかしくなった。また、「バウ」概念の根幹たる建築も、そこにかつてはモニュメントや壁画を伴っていた建築も次々と取り壊されて、今日では、わずかの例外を除けば、竣工から 30 年ほど経てば、まるで普通の消費物品のように、完全にリニューアルされることが普通になった。こうした変化にまで至って、「バウ」を中心とした総合芸術といった実体はどこに成り立つ可能性があるのだろうか。そうした現実を踏まえれば、研究と評価の視点を変えていく必要もあるのではないだろうか。例えば、バウハウスを論じるのにその背景にある「抽象絵画」を産み出した地域としての中部ヨーロッパ、未来派やロシア・アヴァンギャルドとも通底する時代としての 1910 年代から 20 年代、をしっかり踏まえて、地域性、時代性、特殊性の観点からさらに掘り下げてバウハウスを見つめ直す時期が来ているのではないか。生誕 100 年のお祝いはいいにしても、「バウハウス神話」は、果たして今後も生き延びるものだろうか。

（山梨委員）
総評：
　バウハウスに関するこれまでの研究、ミサワホームをはじめとするコレクションをよく反映された展覧会であるが、同校のあり方には時代背景が大きく関与しており、図録の論考が鑑賞者の理解を助けるところが大きいと思われる。
　本展は、「バウハウス展」（1971 年 2 月　国立近代美術館）、「バウハウス展－ガラスのユートピア」（2000 年 3 月　宇都宮美術館）などの構成を踏襲しており、諸芸術を建築の中に統合しようとしたバウハウスの教育（指導者とその教育を受けた学生の作品）を紹介し、その教育がバウハウスで学んだ美術家たちにどのように受容されたかが豊富な作品・資料によって紹介されているが、同校で学んだ水谷武彦、山脇巌・道子、大野玉枝に関して従来よりも重きが置かれている。大野の紹介はこのたび新たに行われており、意義深い。また、大阪市立工芸学校におけるバウハウス教育の受容について具体的に明らかにする論考は、東京以外の地域でのバウハウスからの影響へと目を開くとともに、今後の調査の広がりに資するものである。

今後の課題：
　図録の論考にもあるように、バウハウスは諸芸術を建築に統合することを目指した造形学校であったが、日本建築史においては建築の近代化にとってル・コルビジェの影響が大きく取り上げられ、建築分野でのバウハウスの受容があまり語られていない。むしろ、クレー、カンディンスキー、モホイ・ナギのようにバウハウスで教鞭をとった画家、写真家から日本の美術家たちが受容したものについて調査研究がなされてきている。今後は、日本の建築分野でバウハウスでの教育がどのように展開されたのかをさらに明らかにすることが望まれる。
　また、バウハウス創立１００周年に際してドイツで設立された記念事業「Bauhaus100」のプログラムのひとつである国際プロジェクト「bauhaus imaginista」では、バウハウスを顕彰するため、「バウハウスとマニフェスト」「パウル・クレーの素描作品《カーペット》」「マルセル・ブロイヤーによる椅子とそのデザイン過程」をバウハウスの理念と実践を考えるための３つのカギになるアイテムと位置づけ、世界におけるその受容と展開を「Correspondence With（応答）」「Learning From（学習）」「Moving Away（展開）」と題した 3 章で検証してウェブ公開している。同サイトには中国、アメリカ、北朝鮮などのバウハウスとの関わりを示す論考が掲載されており、バウハウスの教育が各地域に異なる形で受容されたことがわかる。そうした国際比較も今後のひとつの視点になろう。
　機械文明の発達の中で手仕事をどう位置付けるかという点において、アーツ・アンド・クラフツ運動とを比較してみる視点も興味深い。

【パラレル・ヒストリーズ展】〈自主企画展〉

（潮江委員）
総評：
　今回の現代美術の展覧会、「パラレル・ヒストリーズ」展は、ともするとある一つの運動や傾向が生起して収束するという形での美術の歴史の提示という方法ではなく、現代美術のキー・コンセプトを六つにまとめて文字通りパラレルに呈示して、観者に現代美術についての包括的な視点を喚起するべく仕組まれた、創意工夫を感じさせる展覧会になっている。もとより館独自のコレクションという限られた資源の中で包括的な視点を喚起する展示を構成することには困難があっ

たと推察されるが、その問題点を一定以上の効果が期待される形で克服していることは、高く評価できる。というよりも、これもまた、静岡県立美術館のこれまでの収集活動の努力とその成果があったればこそと、改めて感心した。海外作品と日本の作品が混在していることも、新たな視点を触発させる、という意義と持ったと思う。歴史の「流れ」ではなく、広い視野で見た「現代美術」への転換は、鑑賞者には、予定調和的納得へと導かなかったかも知れないが、一時的な混乱からもたらされる新たな視点の形成へと向かうきっかけにはなったと思う。

今後の課題：

今後のさらなる収集活動によって、ここで呈示したキー・コンセプトに最適の作品を充実させ、また、新たなるキー・コンセプトを追加して、それらの下に現代美術の多様性が語られるようになることが望まれる。

（山梨委員）

総評：

現代アートをどのように定義し、分類するかは、対象が現在進行形であることもあって、大変困難な問題である。本展覧会で設定された「絵画という難問」「空間とのかかわり」「地面と重力」「アートの断捨離」「見ることの不思議」「テクノロジー」という６つの観点は、作家のアイデアが反映された物質を人の眼で見ることによって成り立つ造形芸術というものの基本を再確認させるものであった。

展示を「絵画という難問」という章から始め、冒頭に吉原治郎の「work」（1959 年）と齋藤義重「作品 2」（1960 年）の作品を配置し、その後、草間彌生、磯部行幸、李禹煥とゆるやかに編年的に作品が展示されており、人間が古くから親しんできた絵画という分野で、本展覧会が対象とする時代に起こったことを鑑賞者が認識できるよう配慮され、わかりやすい導入となっていた。関根信夫の「位相―大地」が展示されている第２の観点「空間とのかかわり」から、宮島達夫の「Life(complex system)」を含む第６の観点「テクノロジー」まで、次第に人間の身体性が直接に感じられない作品に向かっている現代美術の傾向を作品から体感できる構成になっていた。

グループ「幻触」の作品のほか、静岡ゆかりの作家の作品が多数出品され、日本後美術と静岡とのかかわりが追えるように構成されていたことも意義深い。地元の方々が、日本の現代美術を身近に感じる契機となったのではなかろうか。また、静岡県立美術館が地元静岡の美術活動を積極的に調査し作品を収集してきたことも伝わったはずである。

展示作品の形式、様式が多様である一方で、出品作の色調が白、黒、赤を基調として統一感を持っており、会場全体に色彩的なまとまりがあった。

展示された作品はどれも大変質が高く、現在では公立美術館の予算で購入がかなわないほどの市場価値をもつと予想されるものが多数ある。静岡県立美術館が歴史的な観点を踏まえて現代美術の動向を追い、収集を続けてきたことをよく示す展覧会であった。

今後の課題：

この度の展覧会では、戦後の社会や技術の変化に作家がどう対峙したかよりも、現在の鑑賞者が作品とどのように向き合うかに重点が置かれているが、会場パネルにもあったように、現代美術は多様であり、本展で設定された６つの観点のほかにもいくつか観点を設定することができよう。

異なる切り口でのコレクション展も試みることで、現代美術に親しむ契機を積極的に作っていただきたい。
引き続き、静岡の戦後美術の調査研究を進めるとともに、現代美術作品の収集をしていただけるよう期待している。「現代アート」の定義についても検討を続けることが、よい作品の収集の一助となると考える。

評価指標９	調査研究に対する外部評価

① 研究紀要 南美幸「マルキ・ド・サド『イタリア紀行』ナポリ編について―エルコラネンセ美術館の記述を中心にした翻訳と解題」

（潮江委員）
総評：
本翻訳の試みは、真面目一辺倒にも見える新古典主義運動の霊感源となったヘルクラネウムとポンペイからの発掘品について、あのサドが大きな関心を抱き、しかもそれを検分し、その意義について語っている、そのことは、教養人サドの証として、彼自身に対する見方や評価にいささかなりとも変更を迫るだけでなく、この両遺跡の発掘が同時代に対して有していた衝撃の幅の広さを改めて考えさせるものになっている。

今後の課題：
今回の論考では、どちらかというと、フランス中心に事柄が語られているが、ドイツ人にも、イギリス人にも、この古代ブームに敏感に反応した人々がおり、時間的かつ地域的な観点から、それらとの関係は、どのようなものであったかさらに調査解明していただければと思う。また、これはたんなる思いつきにしか過ぎないが、どっぷりロココ文化だったヴェネツィアに、アントニオ・カノーヴァが登場したこととサドの古典的教養とが触れあうことがあったのか、などと空想させるところがある。

（栗田委員）
総評：
「古代への情熱―18 世紀イタリア・考古学と芸術の出会い」展（2019）実施の延長上にあると思われる研究テーマである。論考内に予告されている本格的な考察研究の準備段階として基礎資料を翻訳・紹介しておくことは、次なる研究の水準を高めるのに役に立つので、こうした基礎作業は大いに評価できるとともに、次なる論考の成果が大いに期待できる。

今後の課題：
サドの『イタリア紀行』の意義を評価するためにも学術誌等における書評への目配せも怠らないようにしたい。例えば、ある書評では（Ehrard Jean. D. A. F. marquis de Sade : *Voyage d'Italie*, vol. I : Édition établie et présentée par Maurice Lever. 1995 ; vol. II : Dessins de Jean-Baptiste Tierce. Choix des œuvres et des légendes par Maurice Lever. Notice sur Tierce par Olivier Michel. Idem. In: *Dix-huitième Siècle*, n°28, 1996. L'Orient. pp. 583-584. www.persee.fr/doc/dhs_0070-6760_1996_num_28_1_2139_t1_0583_0000_5）、本論文の文献表にはない学位論文の存在等の情報がいくつか指摘されている：la thèse de doctorat de Georges Festa, *Marquis de Sade, Voyage en Italie (1775-76). Édition critique* (4 vol., Clermont-Ferrand, Université Biaise-Pascal, 1991)。

12 頁の注 27 に「王室造営物局総監」とあるが、 directeur général des Bâtiments du roi の訳語であろうか。Bâtiments du roi は通常王室建造物局と訳されるので、訳語選択の基準に補足が必要であろう。同職は、ルイ 14 世治下は Surintendant des Bâtiments と呼称され、ルイ 15 世治下以降 Directeur général des Bâtiments du roi と呼称された。区別するには、前者を王室建造物局総監、王室建築総監、後者を王室建造物局長官、王室建築長官とすることも可能であろう。

② 研究紀要 川谷承子「高松次郎「布の弛み」に関する考察」

（潮江委員）

総評：

全体として、静岡県立美術館所蔵の高松次郎の「布の弛み」が、いかに時代を画する作品であるかを複数の観点から証明した充実した研究成果となっている。

今後の課題：

「発注芸術」に着目したのは興味深いが、物質の語らせ方について、ミニマリズムと「もの派的思考」の微妙な差異についてもう少し考察を深めると、「布の弛み」もさらに見えてくるのではないかと思う。また、弛んだ布が重力で垂れる展示方法と、形状が展示者によって選択できるケースとの差異について、作者はどのように考えていたのだろうか、という疑問は残っている。

（山梨委員）

総評：

自館の所蔵作品である高松次郎「布の弛み」について、複数ある「布の弛み」の中で、当該作品が第 6 回パリ青年ビエンナーレ出品作であることを明らかにし、また、静岡県立美術館での展示の際に作家自身が展示指導した方法について資料を公開した点で、本稿は高い資料性を持っている。

本稿の筆者川谷氏は、静岡の戦後美術で 1960 年代後半から 70 年代初頭に注目すべき活動をしたグループ「幻触」について調査研究を進め、2014 年に展覧会を開催している。本稿は、その成果を踏まえて、同グループと同時代に活躍し、影響力の大きかった高松次郎が 1969 年に制作した「布の弛み」について考察したもので、これまでの調査の蓄積に裏付けられている。

「高松次郎　制作の軌跡」（国立国際美術館　2015 年 4 月）「高松次郎　ミステリーズ」（東京国立近代美術館　2014 年 12 月）などにより国内での高松に関する言説が一段落する一方で、海外での「もの派」、「具体」などへの関心の高まりと調査研究成果により新たな視点での、高松評価がなされ始めている現状において、本稿は、「布の弛み」の基礎データを整理し、作品を論ずるいくつかの視点を提示しており、今後の調査研究に資するものである。

今後の課題：

著者自身が本稿の結びで記しているように、国立国際美術館、東京国立近代美術館で 2014，15 年に開催された高松次郎に関する基礎研究が一段落し、また「「もの派」再考」（国立国際美術館 2005 年）や海外での「もの派」や「具体」についての展覧会や研究成果などによって「もの派」に関する言説があらたな局面を迎えようとしており、今後、それらを踏まえた再解釈がなされることが期待される。　本稿での基礎データ確認とこの作品を見るいくつかの視点の整理をもとに、これまでの川谷氏の調査研究の蓄積を活かした考察がなされることを期待する。たとえば高松とグループ「幻触」、「トリックス＆ヴィジョン」展との関係などについても、関係者が期待するところと思う。

評価指標 14	公開・貸し出した展覧会における学芸員のレポート

（西洋）

3 点の作品を「クールベと海　フランス近代　自然へのまなざし」展に貸し出した。同展は、19 世紀レアリスムの画家の足跡を、同時代やその前後の世代の芸術家の作品も交えつつ、海景画を中心に、故郷を描いた風景画や狩猟画等によって辿るものである。当館からは、クールベ以前に畏怖の対象としての海を描いたクロード＝ジョゼフ・ヴェルネの《嵐の海》、19 世紀前半の理想的風景画であるアシル＝エトナ・ミシャロンの《廃墟となった墓を見つめる羊飼い》、自然の中の野生動物を表した彫刻としてアントワーヌ＝ルイ・バリーの《ライオンと蛇》が紹介された。

【上席学芸員・南美幸】

（日本画）

今年度は、新型コロナウィルス感染拡大により、緊急事態宣言が発出されたため、貸出したものの内覧会のみ展示、貸出のみの作品が複数あった。そのなかで、竹内栖鳳《揚州城外》、入江波光《草園の朝》を兵庫県立美術館で開催された「超・名品」展に貸出し、展示された。また、京都市京セラ美術館開館記念展の「京都の美術 250 年の夢―江戸から現代へ―」展に徳岡神泉《雨》を貸出した。東京都美術館の「読み、味わう昭和の書」展には、森田安次の作品 2 点《風の又三郎》、《水》を貸出した。

【上席学芸員・野田麻美】

（現代）

今年度は、新型コロナウィルス感染拡大により、緊急事態宣言が発出されたため、現代作品の貸出は、無かった。

【上席学芸員・川谷承子】

（日本洋画）

今年度は、新型コロナウィルス感染拡大により、緊急事態宣言が発出されたため、日本洋画の貸出は、無かった。

【上席学芸員・泰井良】

評価指標 18	普及・教育プログラムに関する美術館職員のレポート

＜一般向け＞

全国緊急事態宣言のため、４月から５月の実技室プログラムは中止することになった。６月から消毒や換気、参加者の人数制限等の対策をとりながらプログラムをすべてではないが再開することができた。

「みんなにミュシャ」展関連では、版画家の柳本一英氏に講師をお願いし、リトグラフの講座を実施した。新型コロナウィルス感染症拡大予防対策として、展示室での解説をやめ、別室にてミュシャが活躍した時代やリトグラフの工房について、担当学芸員と講師の対談形式での話を聴講後、作品鑑賞をすることとした。鑑賞後、作品の一部を模写する制作を通して、ミュシャ作品の線の細やかさ構図の巧みさを感じることができる講座となった。

切り絵作家福井利佐氏に講師依頼した講座では、福井氏が東京在住で来館することができなかったため、美術館実技室にいる参加者と講師をオンラインで結び、制作活動を行った。ネット環境の整備や講座の段取り等、課題もあったが、今後に活きる講座となった。

コロナ禍で準備を進めていたが、中止を余儀なくされたプログラムもあった。しかし、制限された中でも対策をとりながら展覧会と関連させた内容の普及活動をバランスよく行い、展示と鑑賞を結びつけた静岡県立美術館ならではの教育普及活動を展開することができた。

＜学校向け＞

例年行われていた県総合教育センターや各地区の図工美術会の教員向け鑑賞教育研修が新型コロナウイルス感染症拡大予防のため中止となってしまった。また、校外学習の一環で「美術館の秘密を探れ」や「ロダン館ななふしぎ」を例年希望する学校が、今年度は取りやめになり、学校現場では一斉休校を経て学校再開に向け安全対策や授業時数の確保等、課題が多い様子であった。

一方で、修学旅行等の代替案として県内旅行にした学校が来館し、初めてプログラムを活用するという事例が複数あった。

今後は、新しい生活様式に対応した普及・教育プログラムの教材開発・提供の必要性が高まり、対応が急がれる。

評価指標 23	地域空間、住民等と連携した取組に関する職員レポート

これまでの地域等の連携をさらに深め、地域をパートナーと考える経営を推進した。

地域・企業等

（１）開館以来、活動を続けている県立美術館ボランティアは活動任期が３年であり、平成 30 年度末に任期が切れたため、新ボランティアの募集を行い、136 名を採用した。

・活動期間（任期）：平成 31 年４月１日～令和４年３月 31 日（３年間）

・活動方針：「来館者サービスの充実、美術館運営支援、地域連携推進」

（２）有度山地域に立地する５施設、県立美術館、ＳＰＡＣ、日本平ホテル、日本平動物園久能山東照宮による「有度山フレンドシップ協定」による協働。

・コロナ禍の中、今後、企画展との連携事業を検討していく。

（３）草薙商店会等との協働

・草薙商店会主催の「つながるくさなぎ」夏フェス、冬フェスにて毎年実技体験を実施していたが、新型コロナウィルス感染拡大防止のため、中止になった。

・草薙地域で活動しているグループと連携して美術館前の広場でロダン・ウィーク「丘の上のマルシェ」を毎年開催していたが、今年は新型コロナウィルス感染拡大防止のため中止になった。

（５）ロダン・ウィーク

平成 26 年度、開館 20 周年を契機に開始した「ロダン・ウィーク」。その第７回を 10 月 31 日（土）から３日（火・振）の間、開催した。

・草薙商店会との協働による「丘の上のロダンマルシェ」は中止になったが、ロダン賞コンサート、めぐるりアート静岡の展示、友の会主催の消しゴム、スタンプ作り、万華鏡作り、にがお絵等のワークショップを実施した。

・「ロダン・ウィーク」期間中は、ロダン館・収蔵品展の入館料を減免し、無料観覧による誘客

・ロダンやその作品に関するクイズラリーを実施し、クイズにお答えいただいた方に、先着で、オリジナル缶バッチをプレゼント

・４日間で 1,666 人がイベントに参加した。

（６）企画展における企業等との連携による効果

・「みんなのミュシャ」展では新静岡セノバの協力でセノバ館内に大々的に広報を実施

・「富野由悠季の世界」展では、館内レストラン「ロダンテラス」で特別メニューとして「赤い彗星のレッドカレー」を提供した。

ムセイオン静岡

谷田地域の文化教育７機関（県立大学、美術館、中央図書館、埋蔵文化財センター、ＳＰＡＣ、グランシップ、ふじのくに地球環境史ミュージアム）が多分野における連携を進め、更なる文化の情報発信を目指した。

（１）「ふじのくに文化の丘フェスタ」の実施

ムセイオン７施設を巡るスタンプラリー

令和２年 10 月 24 日(土)から 11 月８日(日)まで実施した。

（２）ムセイオン静岡協働イベント「岡村昭彦の知の世界」実施

期間：令和２年 10 月 26 日（月）～令和２年 11 月 25 日（水）

参加施設：静岡県立附属図書館、静岡県立中央図書館、静岡県立美術館

当館では、県民ギャラリーにおいて岡村昭彦写真展「岡村昭彦の写真にみる生と死、いのちをつなくたべもの」（令和２年 10 月 27 日（火）～令和２年 11 月８日（日）を開催

評価指標 28	広報手法における新たな取組状況に関しての美術館職員のレポート

昨年度に引き続き、様々な広報手段を活用し、県内外への広報を推進した。
企画展の共催者・協賛者等と協働した広域的な広報を目指した。

広報活動

①ホームページ、フェイスブック、インスタグラム、ツイッター、YouTube による情報発信
②展覧会等イベント情報のマスコミへの資料提供
③ポスター、チラシの配布、駅貼り、車内吊り
④県公聴広報課との連携（県民だより、県政番組、ラジオ番組出演）
⑤広報サポーターへの情報提供
⑥展覧会共催者（新聞社・テレビ局）、協賛者等との連携
⑦共催者が企画する講演会・イベントを館内で行い集客を図った。
⑧美術館ニュース「アマリリス」の発行
⑨インターネットミュージアム等の美術館・博物館情報サイトで展覧会をＰＲした。

県有文化施設と協働した広報

①「ふじのくに文化の丘フェスタ 2020」文化の丘スタンプラリーに参加
② ムセイオン静岡協働イベント「岡村昭彦の知の世界」実施
③「めぐるりアート静岡」への参加

新たな取組

①「みんなのミュシャ」と「ムーミン展」では、平日に展覧会ポスター（非売品）のプレゼント企画を実施して集客を図った。
② 公式 YouTube チャンネルを開設して、紙芝居「カレーの市民」、ロダン体操等など動画配信を行った。

【資料４】

第三者評価委員会での主な意見と対応状況

基本方針Ａ：人々の感性を豊かにし、生活に新たな感動をもたらすような展覧会を開催します

1　前回の委員からの意見
様々な文化施設が来館者の取り合いをしている中で、来館者数を求めるのではなく県立美術館としてどのようなターゲットにアピールをしていくのかを考えるべきではないか。（田中委員）
2　これまでの対応状況
・来館者に満足いただけるような内容を目指すことが、すなわち当館のコアな来館者へのアピールとなるため、その期待を裏切らないよう努めている。 ・来館者の層は展覧会によって異なるため、企画展ごとにターゲット層と広報を変えている。「パラレル・ヒストリーズ」（令和２年度）や「忘れられた江戸絵画史の本流」（令和３年度）では、新しい広報ツールとしてインターネットバナー広告やプレスリリース配信サービスの利用、ニコニコ美術館における学芸員の生解説など、従来にない広報を展開した。広報面での工夫は重ねているものの、人的、予算的な対応が出来ていないため限界がある。 ・「忘れられた江戸絵画の本流」については、歴史教育にも活用していただくよう教育委員会等を通じた小中高校等への広報にも取り組んだ。 ・美術館広報委員会では、自主企画展や収蔵品展について予算の範囲内で実施可能な広報手段について検討する場を設けている。令和３年度の「忘れられた江戸絵画の本流」展においては、「江戸狩野派総選挙」、「企画展サテライト展示」、「静岡大学での PR 活動」が提案され実施した。
3　今後の展開
・当館のコアなリピーター層の期待に応えられるよう展覧会内容の充実を図るとともに、新たな来館者を開拓するために、これまでにない切り口による展覧会を行う。 ・コレクションの充実とその魅力の発信を重視し、コレクションを通して、企画展に訪れるだけでない安定的なファン層を築いていく。 ・情報入手手段が多様化する中、従来のマスに向けた広報のみではターゲット層に適切に情報が届かない。展覧会情報をターゲット層に届けるためのきめこまかな発信力が必須であり、立ち遅れてきた広報面の拡充を図る。 ・広報における美術館広報委員会の役割について、美術館と文化政策課で検討を進める。 ・美術館ホームページを充実させ、収蔵品や企画展の魅力を伝え、新たな来館者の獲得に努める。

基本方針Ａ：人々の感性を豊かにし、生活に新たな感動をもたらすような展覧会を開催します

1　前回の委員からの意見
評価の基準となる数字が、一部企画展の紙アンケートによるもので回収率も低い。QR コード式のアンケートやグループインタビュー、モニタリング調査等を取り入れて精度を上げてはどうか。（荻原委員）
２　これまでの対応状況
・新型コロナウイルス感染防止のため、従来の対面によるアンケートから、希望者に用紙を配り、記入してもらう方式に変更した。また、委員会での意見を受け、令和３年度の「ストーリーズ」展から、ＱＲコード式のアンケートを取り入れた。
３　今後の展開
・コロナ禍では、対面式のアンケートは難しいため、当面は、用紙を配り記入してもらう方式とＱＲコードの二つの方式により、回収率を向上させる。 ・精度向上のためのアンケート手法の工夫は今後の検討課題とする。

基本方針Ｂ：地域や学校教育との連携を深め、質の高い芸術教育と普及活動を展開します

1　前回の委員からの意見
大学生は忙しいので、美術館へ行く時間がなかなか取れない。そもそも無料であることを知らない学生が多いのではないか。チラシやチケットを配ってＰＲしてみてはどうか。（田中委員）
２　これまでの対応状況
・令和３年度の「ストーリーズ」展では、ゴールデンウィーク前に県立大学事務局に依頼し、メーリングリストにより「大学生は入館無料」の広報を行った。また、県立大学における企画展ポスター掲示では、学生無料の表記を別途貼り出すなどしてＰＲした。 ・令和３年度 4.5 月に静岡大学で企画展「ストーリーズ」と「忘れられた江戸絵画史の本流」の PR 活動を行った。
３　今後の展開
・今後も大学への働きかけを強化し、県内の大学生に美術館を知って貰えるよう、美術館、文化政策課で方法を検討する。

基本方針Ｂ：地域や学校教育との連携を深め、質の高い芸術教育と普及活動を展開します

1　前回の委員からの意見
学校や学生の多忙化に対応するため、オンラインを活用した鑑賞授業などを美術館が提供することで、質の高い芸術教育の普及へとつながるのではないか。（神山委員）
２　これまでの対応状況
・鑑賞授業に活用できるよう、公設 YouTube チャンネルにカレーの市民の紙芝居の読みきかせ動画をあげた。 ・令和２年 12 月補正予算でコロナ禍における安心安全な鑑賞環境の提供のために、オンライン鑑賞を含むデジタルコンテンツの拡充のための予算を計上した。令和２年度末に業者と契約し、今年度中の公開を予定している。
３　今後の展開
・デジタルコンテンツ及び、YouTube チャンネルの活用については今後、美術館と文化政策課で協議を行い進めていく。

基本方針Ｂ：地域や学校教育との連携を深め、質の高い芸術教育と普及活動を展開します

1　前回の委員からの意見
県立大学や文化芸術大学には観光系の学科が新設されているが、連携の予定はあるのか。（櫻井委員）
２　これまでの対応状況
・常葉大学とは友の会イベントの運営で連携しているが、現時点では、観光系の学科との連携の予定はない。
３　今後の展開
・令和３年度の移動美術展（浜松市美術館）で、静岡文化芸術大学のアートマネジメントを学ぶ学生とシンポジウム運営等で連携する予定。観光系学科との連携についても情報収集をしていく。

基本方針Ｃ：さらに積極的な広報を工夫し、美術館活動の情報発信に努めます

1　前回の委員からの意見
広報人材を確保し長期的に育成することが重要である。例えば、地域のボランティアを募りインフルエンサーチームを結成、美術館のＳＮＳアカウントを運用してもらうなどが考えられる。（前田委員）
２　これまでの対応状況
・美術館広報サポーター（県内 40 名）にポスター、チラシ、割引券を送付し、それぞれの地域での宣伝活動を行ってもらっている。 ・しかし、主に印刷物を利用した手法であり、ウェブ等を活用した広報展開は立ち遅れているといえる。
３　今後の展開
・ＳＮＳを利用した美術館情報発信を美術館ボランティアに依頼する。 ・アクセス解析により閲覧数、曜日、大まかな時間帯の動向は把握しているが、分析・活用のノウハウがない。長期的な視点で分析できる広報人材を確保したい。 ・広報専任職員の確保は必須であり、その早期の実現を目指す。 ・広報アドバイザーを活用するなど、美術館の広報力の強化に取り組む。

方針Ｄ：常に施設の改善に努め、美術館の快適度を高めていきます

1　前回の委員からの意見
県立美術館は、立地的にふらっと立ち寄れるような場所ではなく「心地よい芸術体験」を求めてわざわざ足を運ぶ場所である。そういったニーズに見合った体験や鑑賞環境を提供するよう心がけるべき。（田中）
２　これまでの対応状況
・評価指標の１つとして「鑑賞環境の満足度」を掲げ、注目してきた。観覧者数の多い展覧会では鑑賞環境の満足度は低くなる傾向があることが分かっており、この点の両立を課題と考える。 ・展覧会の内容と関連づけた「実技講座」「わくわくアトリエ」等の実技イベントを開催、鑑賞と創作の連関を重視し、ここでしか体験できない内容を提供すべく努めている。
３　今後の展開
・新型コロナウィルスの感染脅威が続く中、鑑賞時の「安全」も美術館の快適度を確保するのに重要と考える。鑑賞環境を高め、安全を確保するためにも、ウェブ予約やキャッシュレス決済の導入などを着実に進め、定着させる。

その他の意見に対する対応状況

1　前回の委員からの意見
○「使命」の部分のＫＧＩ(最終目標)が何か明確になっていない。使命の部分に書かれている「地域をパートナーにする」ということの最終的な出口は何かを明確にすべき。 ○ホームページ満足度の基準について、ホームページを見て「来訪したい」と思ったかを示す「再来訪度」を指標に入れてはどうか。（前田） ○美術館のＳＮＳアカウントについて、指標の中にフォロワー数を組み入れるのはどうか。
２　対応について
○評価委員から頂いたご意見を元に、県立美術館と文化政策課で協議のうえ、使命や基本方針を含めた自己評価基準の見直しを行ない、令和３年度自己評価から反映させる。

【資料５】

令和２年度　設置者(県)の取組状況

１　美術館実施事業への協力

これまでの企画展広報において、文化政策課では主に各広報機関への情報提供、県庁内、東京事務所、県観光協会でのポスター、チラシの配架依頼を行ってきた。今後は定例的に広報物を配架する従来の方法だけでなく、美術館広報委員会や、企画運営会議等を通じて美術館の広報に積極的に関わっていく。

令和３年度の「江戸絵画史の本流」展では、広報委員会において広報手段を検討し「江戸狩野派絵師の人気投票」、「静岡大学での企画展 PR 活動」、実施した。検討期間が短かったこともあり、広報手段に関する十分な議論が尽くせなかったため、今後も同委員会で美術館の広報について協議を行いオンライン(Youtube 等)を活用した広報手段の模索等について議論を進めていく。

２　デジタル化の推進

・ウィズコロナ時代において美術館を安全安心に訪れることができるよう、デジタル手続きを導入するとともにいつでもどこでも WEB 上で収蔵作品を鑑賞できるコンテンツの充実を図る。

・多くの方々に美術館に親しんで頂き、来館に誘導するため、コンテンツの「見せ方」及びその周知方法について美術館と協議を進めている。

<table>
<tr><th colspan="2">事業</th><th>概要</th></tr>
<tr><td colspan="2">作品情報管理
システム作成委託</td><td>・クラウドによる収蔵品データ等の一括管理を行うことで、既存の管理方法よりも効率的な管理が可能となる。集約されたデータはデジタルコンテンツの公開</td></tr>
<tr><td rowspan="3">デジタル撮影</td><td>収蔵品撮影</td><td rowspan="2">・収蔵品の中から未デジタル化の作品を選定し、計 445 点の写真撮影を行う。</td></tr>
<tr><td>作品移動</td></tr>
<tr><td>・地獄の門 3D 画像撮影
・超高精細画像撮影
「龍山勝会・蘭亭曲水図」</td><td>館を代表する２作品について、先端技術を用いて撮影を行う。館を代表する２作品が細部まで鑑賞可能となる。</td></tr>
<tr><td colspan="2">事前予約制</td><td>・R3.5 月から導入</td></tr>
<tr><td colspan="2">キャッシュレス決済</td><td>・R3 年度中に導入</td></tr>
</table>

３　劣化診断に基づく中期維持保全計画

・令和元年度に中期維持保全計画（５年間の修繕計画）を策定し、計画的な修繕を実施している。

・令和２年度は主に「本館空調機熱源更新工事」や「特定天井対策他改修工事」の設計業務委託を行った。

対象箇所	契約額（千円）	備考
特定天井改修工事他設計業務委	9,768	Ｒ３工事分
荷物用エレベータ更新工事	52,000	Ｒ２−３債務
本館空調熱源更新工事	160,600	
本館機械室断熱材修繕工事	10,917	
合計	233,285	

４　特定天井対策工事とその他の改修工事

・美術館エントランスホールの特定天井対策工事とその他の改修工事を令和３年９月～令和４年３月に実施する。その間、美術館全館を休館する。

項目	内容
予算	特定天井対策工事　93,600 千円 その他の改修工事　308,436 千円 合計　402,036 千円
休館	令和３年９月上旬～令和４年３月
特定天井対策工事	エントランスホール天井をワイヤーにより落下防止措置
その他改修工事	客用エレベータ・荷物用エレベータ更新、展示室照明ＬＥＤ化、展示室壁改修、屋上防水工事など